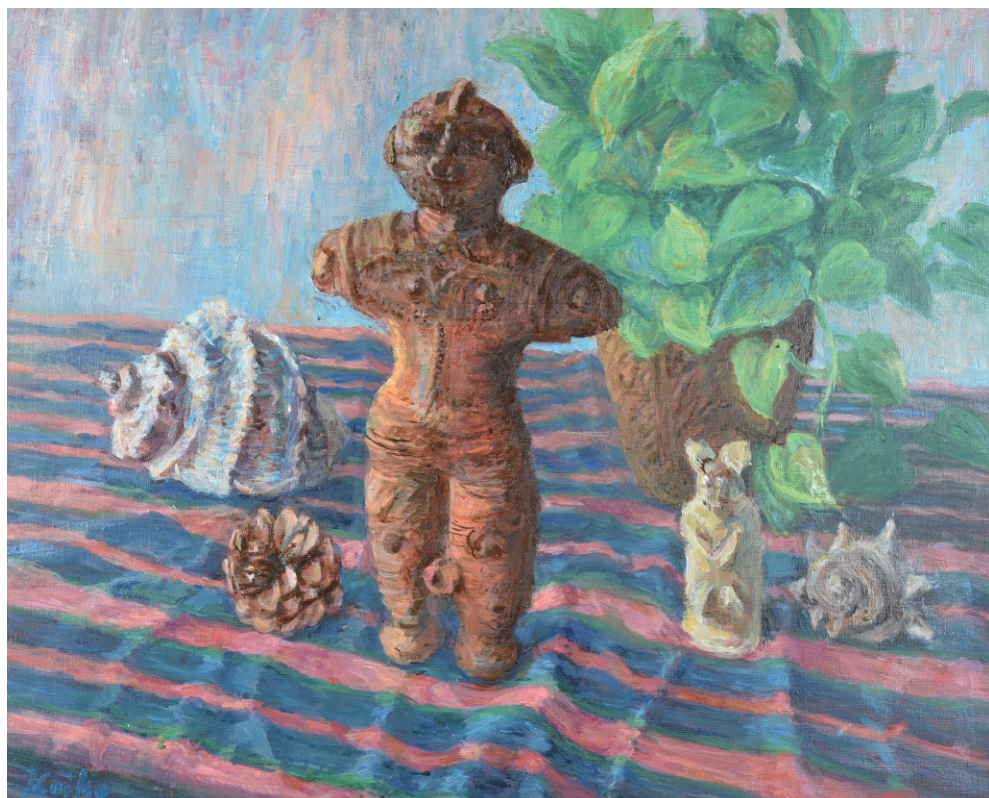


俳句雑誌

令和七年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八巻第八号

水 明

2025 8月号



《今月のかな女》

古簾軒に巻き上げ残暑かな

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

日本の四季が有名無実になった感の近年であるが、この句が詠まれた頃は、季節の移り変りがはっきりしていたと思う。であるから、残暑の言葉から受け取る季節感と軒に吊されている簾の姿が一体感を為している。陽射しの強い真夏の間は、簾を下ろしていることも多かったが、秋の気配を感じる頃から、簾を巻き上げておく日もあるのであらう。特に西日の当たる所には、まだ簾の助けが必要である。季重ねではあるが、残暑を主たる季語として、臨場感のある俳句を構成している。(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

後ろから読む朝刊や明易し

星野和葉

季音月

結界は女郎蜘蛛の囲奥の院

丸山マシミ

季音花

桜まじ江戸の名残の常夜灯

保坂翔太

水明集

流鏑馬や南無八幡と矢を放つ

倉田星歩

鼓笛集

筥や世に出る前に引き抜かれ

皆川更穂

山紫集

風薫る背たけの違ふマグカップ

石関六弦

水 明

令和 7 年
8 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

画廊の灯(作品)

移り香(近詠)

有馬念仏寺(近詠)

百尺竿頭※主宰作品の鑑賞

ゆずり葉※季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

現代俳句鑑賞

☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句

光る星

○自選二十句

原風景愛憎

山本鬼之介

町野広子

森本早苗

五明 昇

檜鼻ことは

星野和葉
松井由紀子
町野 広子
ほか

丸山マスマ
梅澤佐江
大場 順子
ほか

保坂翔太
笹本啓子
横山 君夫
ほか

網野 月を

32 30

石関 六弦

青木 鶴城

岡田 宣子

網野 月を

19

12

10

8

7

6

4

1



○自選二十句

「再現」か「象形」か

『水明誌』を繙く

俳誌望見

菅原 卓郎

網野 月を

田島 健一

梅澤 輝翠

水明集

倉田 星歩
反町 修
岡本 祥子
ほか

作品鑑賞

山本 鬼之介

水琴窟（水明集六月号鑑賞）

池田 雅夫

鼓笛集

62

山紫集

66

句集喝采

菅原 卓郎

72

水明例会報・各地句会報

73・76

全国大会・水明競詠・りんどう忌のお知らせ

81

風声・発展基金御礼

85

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

画廊の灯

山本鬼之介

提督の肖像と夏館

姫垣を慕うてきたか蝸牛

ソプラノの歌に全開水中花

軽装の巫女の出勤青あらし
夕顔が悪しき噂を消し去りぬ
番町のとある画廊の夏灯
むかし此処らは「お玉が池」よ夏の暮
夕焼から貰うて帰るくそ度胸

移り香

町野広子

ステツキの紳士薄暑の街澗歩
麦秋や老舗の宿に水墨画
卯浪立つ私廬をかくらしい
青嵐人の噂のふくらみぬ
指先に移り香紫蘇の葉摘みにけり
卯焼焼海苔納豆宿浴衣
明日去ぬならば手花火全部やつちまへ

いつ頃からか廬をかくらしい。隣で寝ていた夫に言われ「え？私が？」と半信半疑であった。どうやら疲れた日、お酒を嗜んだ日の様である。が、眠った後の事に迄は責任を持たないので、多少のご迷惑は見逃し下さい。その相手も、もう居ない。嘗て子供達を連れて帰省した夏休み。大量の花火を用意して待つてくれていた両親昨年の花火では火付きが悪い。今年は全て使い果たそう。懐かしい思い出である。

近所の小川で今年も螢が飛び始めた。暫し幻想の世界に浸ろう。

有馬念仏寺

森 本 早 苗

魚 板 打 ち 案 内 を 待 つ 沙 羅 の 寺
本 堂 も 奥 の 茶 房 も 扇 風 機
沙 羅 落 花 黙 座 し て 待 つ 寺 の 床
沙 羅 落 花 蛤 石 に 飛 び 石 に
雨 を 乞 ふ 沙 羅 一 輪 を 大 写 し
沙 羅 愛 で つ お 寺 カ レ ー に 舌 鼓 か な
涼 や か や 信 樂 焼 の 水 琴 窟

有馬念仏寺の本堂は、有馬温泉最古の建物と言う。又北政所の別邸跡でもある。
樹齡三〇〇年以上の沙羅双樹が、丁度見頃を迎えていた。
沙羅落花の幽かな音のみの、誠に雅な苔むす庭は、句作りに最適であり、ランチの限定十食のお寺カレーは、実に絶品であった。
そして、床の間に設へた信樂焼別注の水琴窟には、大黒さんのもてなしの心を感じた。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五 明 昇

五月号

填め終ふる小鉤七枚春の雪

小鉤（こはぜ）とは、足袋の足首部分を留めるための薄い金具のこと、通常は四、五枚のものが多く、歌舞伎や日本舞踊で使用する「七枚小鉤」は足袋の丈が長く、足首を隠して着物姿をより華やかに見せる効果がある。七枚の小鉤をはめ終えた役者が向かう舞台には、古来より吉兆とされる春雪が舞い、観客の気分も上々吉だ。

五つ紋行き交ふ道や大石忌

大石忌は、忠臣蔵の大石内蔵助の命日（三月二十日）に、祇園の一方亭で行なわれる行事である。この日、内蔵助の霊前には討ち入り蕎麦や好物が供えられ、馴染みのお客を招いて芸舞妓による舞や抹茶・手打ち蕎麦の接待がある。芸舞妓は、揃いの黒の組の五つ紋付きの正装で参集するため、当日の四条花見小路界隈は壮観な見物となる。

佳き町本所桜の道を影二つ

水明春の吟行会が行われた本所は、東京都墨田区の南半分

を占め、東京の下町の一部を構成している。隅田川に面し、相撲の聖地・両国や繁華街の浅草・錦糸町と境を接し、スカイツリーが眼前に迫るまさに佳き町である。桜花爛漫の墨堤を歩む二つの影からは、江戸の風が残る本所に生き、生涯を地域の振興に捧げた一組のご夫婦の姿が偲ばれる。

春興や劇中劇に蝶が舞ふ

「春興鏡獅子」は新歌舞伎十八番の一つで、江戸城の大奥で小姓弥生が鏡開きを祝う舞踊を踊るうちに、獅子の精に乗り移って勇壮な獅子の姿へと変化するという物語である。一人の役者が「可憐な娘」と「勇壮な獅子の精」を踊り分けるのは圧巻だが、劇中劇の牡丹の花に舞い遊ぶ「胡蝶の精の踊り」には、「春興」の気分が溢れている。

春闇に溶け合ふ地獄極楽図

「地獄極楽図」は、死後の世界である地獄と極楽を対比的に描いた絵図で、仏教の教えを分かりやすく伝えたもの。地獄では様々な責め苦を受ける死者たちが、地蔵や阿弥陀の加護によって極楽浄土に救済されていく様子が表現されている。月明りのない春の夜はおぼろに潤み、地獄・極楽も溶け合っ

て見えるという、艶な雰囲気を詠んだ一句だ。

六月号

廃屋をむかしに還す濃山吹

廃屋と濃山吹の対照が鮮やかで絵画的な一句。廃屋を覆って華やかに咲き誇る山吹の花を見ていると、栄華を誇った往時の姿が偲ばれてならない。過去と現在、減じるものと萌え出づるものとの対比が見事に詠まれている。ちなみに太田道灌ゆかりの山吹の里歴史公園（越生町）では、春風に揺れながら黄金色に輝く三、〇〇〇本の濃山吹が、歴史を感じさせる水車小屋と相俟って風流な趣を醸し出す。

遠き日の邪心を招くチューリップ

チューリップには「愛の告白」「博愛」「思いやり」といったポジティブな花言葉が多いが、色によってはネガティブな意味を持つものも存在する。例えば黄色は「望みのない恋」「報われない恋」「裏切り」、白は「失恋」、黒は「私を忘れて下さい」など。「邪心」とチューリップの花言葉を直接的に結びつけるのは難しいが、報われない恋の花言葉は、他人の幸せを妬む邪心につながる可能性があるかも知れない。

総帆張らば五月の空へ模型船

総帆展帆とは、帆船が全ての帆を広げること。日本海運へ

の期待を込めて昭和五（一九三〇）年に建造された姉妹帆船「日本丸（横浜）」、「海王丸（富山）」が保存されており、総帆展帆が定期的に公開されている。掲句は本所地域プラザ「BIG SHIP」エントランスに飾られた帆船模型に想を得たものと想像され、総帆を張った模型船が晴れ渡った五月の空へ飛び立つ様子が目に見えるようだ。

卯の花の垣根を越ゆる一の糸

三味線の糸には一の糸、二の糸、三の糸の三本があり、一の糸が一番太い糸なので低音域を響かせ、三味線の音色を豊かにする役割がある。その一の糸の音が、卯の花の咲き乱れる生垣を越えて通りまで洩れ出してくるのは、何とも味わい深い風情である。なお、「一の糸」は野蚕シルク（タッサールルク）の糸の種類を表す名前でもあり、中でも「卯の花」は定番の糸のことだという。

水平線に船を繰り出す南風

夏は南高北低の気圧配置によって南寄りの季節風が吹くことが多く、中国・四国・九州・沖縄地方では「はえ」、関東以西の太平洋岸や瀬戸内地方では「みなみ」「まじ」「まぜ」、日本海側では「くだり」と呼ばれる。南風は風力の余り強くない暖かい風で、大漁を約束するといわれ、この風が吹き始めると漁師たちは沖に向けていっせいに漁船を繰り出す。和田三造の名画『南風』を彷彿とさせる一句だ。

ゆずり葉

◆季音六月

檜 鼻 ことは

花筏お椀の舟を出しませう

森本早苗

咲き誇った桜が散る儚さと、その散り際の美しさが織りなす花筏の景色の中に「お椀の舟を出しませう」と語る作者。

「お椀の舟」の措辞から、お椀を船に、箸を櫂に、針を刀の代わりにして京へ旅立つ一寸法師の昔話を思い出します。春のやわらかな風景と、遊び心、そして美意識に富んだ作者の感性を感じる繊細な詩的な一句です。「出しませう」の結びが優雅な余韻を残し、「共に春を楽しみましょう」と穏やかな誘いを読者に投げかけているようです。

ライスカレーと今も呼ぶ人隅田春

菊地ひろこ

桜並木が続く川岸、屋形船や水上バスが川を行き交い、船上からは花見を楽しむ人々の賑やかな声が聞こえ、水面には柔らかな日差しがきらきらと反射し、心地よい春の風が吹く隅田川の辺りを、仲睦まじく散策されているお二人の姿。

「ライスカレーと今も呼ぶ人」の措辞に、作者の温かいまなざしを感じます。頑なというよりも、お連れの方の筋の通った一貫性のあるこれまでの生き方、優しくも凜とした人柄の輪郭を垣間見るようです。

都会でありながらも、どこか、のどかで懐かしい空気がただよう隅田川の風景とともに、二人で過ごす素敵なひと時が優しく詠まれた一句です。

子ら帰るふらここ揺れを残すまま

野口和子

それまではブランコ遊びに戯れる元気な子どもたちがいたことでしょう。夕暮時、遊び疲れた子どもたちは、それぞれに家路に着きます。子どもたちが去ったあとの遊び場には、ブランコだけが、まだ揺れ続けています。「ふらここ揺れを残すまま」の措辞は、子どもたちの賑やかで明るい無邪気な笑い声、辺りを走り回る姿を残像として伝えます。

それまでの賑わいの名残と、ふと訪れる静寂の対比が美し

く、子どもたちの遊ぶ公園の一瞬の情景描写でありながら、どこか人生の一場面を物語っているかのようにも感じた一句です。

講釈師いよいよ佳境に春灯

井上玲子

「宮本武蔵、佐々木小次郎巖流は、今、肥後の熊本ではなく作州津山から岡崎へとスーッと何やら移動しているとの話でございます」六代目神田伯山による「寛永宮本武蔵伝より桃井源太左衛門」の冒頭の一節です。講釈師とは、武勇伝や人情話などを観客に届ける語り手で、まさに話芸の真骨頂。「釈台」と呼ばれる机の前に、その机を「張り扇」で叩きながら、独特の声音と名調子で、聴衆を引き込んでいきます。

落語や漫談、漫才はテレビなどで見る機会が少なからずあるのですが、講談はなかなかそういうわけにはいきません。最近、ユーチューブで拝聴できることを知り、たまに聞くところがあるのですが、たしかに面白い。作者は何処かの寄席で聴いていらつしやるのでしょうか。どうやら話は佳境に差し掛かった模様。季語「春灯」が句に艶やかな景色をもたらしています。

五色の旗なびかせ奈良に風光る

福田千春

五月の中頃、数十年前ぶりに唐招提寺を訪れました。丁度その日は「うちわまき」が開催される日で、早朝から準備が進

められていました。句に詠まれているように講堂に張られた五色の幕が、五月の風になびいていました。句を拝読し、その時の映像がまざまざと甦って来た次第です。

仏教行事や寺院で見られる五色の旗や幕の五色とは、青・黄・赤・白・黒（緑）のことで、仏教の五智や五行、五大を象徴する神聖な色だそうです。

作者は奈良の何処の寺院で五色の旗を目にしていらつしやるのでしょうか。「風光る」の季語が、静けさの中にある尊さ、そして古代から現在に続く時の流れを語っているようで、風に揺れる五色の旗が視覚的に美しいだけでなく、宗教的・歴史的な深みを句に与えています。

米原を過ぎて名残りの雪しきり

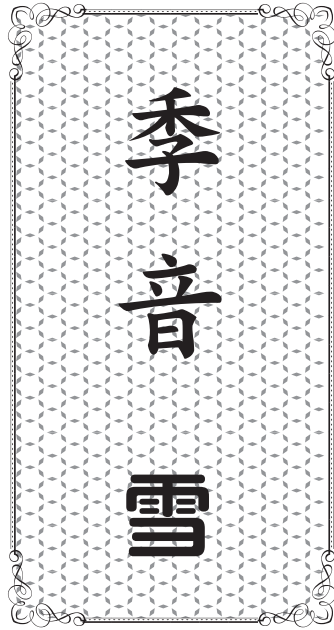
鈴木玲子

東海道新幹線の区間の中で米原付近は日本海型気候の地域。そのため、冬から春の初めにかけて、京都あたりは快晴であっても米原駅近くなると気候は一変することが常です。

「米原を過ぎて」の書き出しに、作者の旅に同行しているかのような気持ちになり、句の世界へ引き込まれます。

米原駅に近づくと今まで快晴であった気候が嘘のように曇天の空となり雪が舞っています。雪は冬の終りを惜しむようであり、旅の名残を惜しむ作者の姿でもあるかのようです。

車内から見える景色の中に、一瞬の情景を切り取り、抒情豊かに旅情を詠まれた一句です。



四 齣 漫 画 星 野 和 葉

安堵して旅に出にけり梅漬けて
後ろから読む朝刊や明易し
明易や四齣漫画然思ふ
蘭鑄に目配せをして忌に参ず
金魚掬ひの子の目なかなか定まらず

木 型 町 野 広 子

宿の名を印すからかさみだるる
五月雨や男湯女湯入れ替る
練切の木型受け継ぐ皐月菓舗
早苗月向かう岸まで届く声
未だ袖を通さぬ着物花みかん

約 束 松 井 由 紀 子

紫陽花の青の溶け入る潦
栗の花ここより先はけものみち
菖蒲田の風は薄むらさきに吹く
山法師白を極めて待つ夜明け
約束は生きてゐること薔薇香る

問 答 茂木和子

青 葉 光 森本早苗

夏椿子供上りの透明感
親しげに近づく鴉梅雨の晴
青水無月水没林のきらら波
鰻屋の前の問答暖簾押す
木耳の栽培かつての防空壕

青葉光巽櫓を押し上ぐる
老鷺の独壇場や今朝の五時
雨被り柏葉紫陽花項垂る
芍薬の控へ目な香を備前壺
短夜の夢の彼の人颯と消ゆ

丸 木 橋 森川義子

蛸 壺 山中みどり

黒南風の磴駆け上る陸上部
遠くへは行かぬ旅なり夏帽子
また小さくなりたる影や夏帽子
夏の川六歩で渡る丸木橋
抜きんづる杭を取り合ふ川蜻蛉

古唐津の大皿水蛸の薄造り
透きとほる蛸の刺身や潮の音
炊き込みの蛸の吸盤海の幸
放しやる小蛸素早く波の下
蛸壺を束ね早寝の漁師宿

南無無量光 網野月を

囲まれて昼寝を醒ます橋の姫
遠吠えや遠近そここ夏の鬱
狗ならむ鶴の夜哭きや夏至明くる
短夜や両の手に享く朝日影
パウロ祭吾知る人を知る足日

花蜜柑 石井喜恵

帆船の揺らぐ航跡夏の雲
花蜜柑湾一望の指定席
花蜜柑香りを分かつ風の道
見目美しき傘の会釈や梅雨の坂
雨蛙跳んで隠れてまた跳んで

雨蛙 井上燈女

乗りし手に青さを重ね雨蛙
銭入れの籠ゆれ路傍の西瓜売り
能舞の青年清し梅雨の月
一枚ごと蛙塗り光深くせり
田植機に老農ひとり淋しかりけり

黒南風 石山かつ子

「装苑」や八頭身の乙女の夏
玉葱や夫婦別姓とはゆかず
抜襟の熟女がひとり夏航路
黒南風に流す嘘なら許せさう
黒南風や何も答へぬ反抗期

短　　夜　　　大橋 勉 代

明早し金堂開くる青つむり
短夜の明けたる浜の坐礁船
六月の空がこんな青いと
は女二人青梅落とす城の垣
夏行とや籤で雑魚寝のふとん部屋

足まかせ　　　大村 節 代

麦の秋小さな旅は足まかせ
蛇 莓 単 線 で 行 く 母 の 里
石 投 げ の 小 石 を 探 す 夏 は じ め
新 緑 や 耳 立 て て 聞 く 君 の 声
洗 ひ 髪 ゆ つ た り 束 ね 書 く 手 紙

君　付　け　　　小倉 倭 子

ひと時の心穏やか鐘 臈
鉦の木声涙俱に下る旧友会
久々の友に君付け心太
釣 忍 近 く て 遠 き 間 柄
それぞれの人生それぞれ麦の秋

夏　　　椿　　　栢 尾 さく子

戸障子の梅雨じめりして友の忌よ
崖上の咲くを待たるる夏椿
梅雨怒濤過ぎて何もなきごとく
補聴器でさがす早春の物音
紫陽花やひと日けだるき波の音

蔓 薔 薇 菊 池 ひろこ

六 尺 を 境 延 昭

中庭に蔓薔薇植ゑぬ呪詛のごと
蜘蛛の囀と共に揺れをり童唄
空腹感なき蜘蛛の囀の雨催ひ
短夜や衣桁に掛けし紅の紐
朝曇り錆色帯びし薔薇の茎

六尺を決めて山笠勇み立つ
玉葱吊し潮風とほす野良の小屋
昼飯のあとの極楽三尺寝
青嵐溪の岩屋に幣が立つ
宝物殿に抜身の古刀梅雨の闇

夏 め く 五 明 昇

紗 一 の 忌 椎 野 美 代 子

脇往還韋駄天で行く青嵐
夏霞大吊橋を天あめの座に
沖行くは紀文の船か花蜜柑
紫陽花に焦がれて越ゆる切通し
梅雨湿り縋りて渡るかずら橋

紫陽花や溺る深入る紗一の忌
生涯の終の思慕濃き濃紫陽花
眩しきは皓齒白靴腕まくり
はつ夏の潮の香ふふむ貝釦
余生なり気怠き平和合歡の花

水無月 島津初花

短夜 十倉和子

水無月の朝川の音に目覚めたり
青田から青田を跨ぐ若狭道
かな女碑に雨の明るし花菖蒲
目高飼ふ整骨院の軒狭し
唐突に彼の白髪や花水木

音立てずナース来てをり短かき夜
声高に漁夫ら路地ゆき明易し
雨蛙鳴け鳴け予報より確か
ムンクが叫ぶ青蔦に窓ふさがれて
晚鐘の余韻嫋々大植田

初夏の花 鈴木康世

雨 鳥羽和風

菩提寺の裏山著莪の花明り
思惟いまだ著莪の花咲く中に佇ち
ひつそりと古き茶寮や著莪の花
石楠花の群落燃ゆる天城かな
蘿の花役行者の修行跡

野仏の総身を洗ふ夕立かな
蝸牛旅の古刹に雨女
虹の橋三夫婦揃ふ渡り初め
痾癩も苛立もなき蝸牛
一升を盛らげて計る実梅かな

白拍子 永野史代

白拍子の泪雨かも五月雨
池塘秘め五月の森はしづまれり
万太郎が手招きをして鬼灯市
わが憂さを察知したかに梅雨の蝶
己が影透かして湖へ黒揚羽

☆ ☆

最近の名句集を探る

筑紫磐井 司会

大木あまり『山猫座』

朴美代子『母』

大井恒行『水月伝』

高橋睦郎

特別作品40句

『巻頭三句』

中原道夫／仙田洋子

木暮陶句郎／長浜勤

二上貴夫／土屋みさ子

『今月の華』

石田郷子＋黒岩徳将

『俳句と短歌の10作競詠』

甲斐のぞみ＋遠藤由季

『今月のハイライト』

「天為」創刊35周年他

◎師と弟子、弟子と師

佐怒賀直美 沼尾將之

◎四季吟詠選者競詠新作10句

夏井いつき／佐藤文字

足立賢治／松尾隆信

水内慶太／米田規子

行方克巳

庫藏会

大西朋 後藤章 野崎海手

『好評連載』

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、

俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

―古典籍を旅する

萬屋重三郎の手掛けた

本の図版を掲載

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2025年9月号

8月20日発売 定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

途中下車

丸山 マスミ

補助輪を外し五月の風と行く
早苗月風に身を置く途中下車
栗の花重き風来る峡の闇
渡し舟に客来るまでの三尺寝
結界は女郎蜘蛛の囲奥の院

著莪の花

大場 順子

衣川 古戦場跡 青時雨
青蔦のぞく子の部屋占むる世界地図
篁は寺の抜け道 著莪の花
観世音の御目の中の著莪の花
植田千枚水の匂ひの出羽の国

籐椅子にて

梅澤 佐江

能装束の金襴翳る墜栗花雨
黒南風に昼を点せる松本楼
蜘蛛の囲の美しき迷宮雨後の庭
湧水清し「お鷹の道」の夏木立
籐椅子にシヨパンとワイン更けゆく夜

祠仕舞ひ

近藤 徹平

黒南風や祠仕舞の立烏帽子
目抜きに競ふ祭太鼓の桴捌き
チーママの振り鉢巻練る神輿
義経が従者装ふ夏芝居
困民党決起の神社蛇苺

木下闇

原田 秀子

爪革の汚れを拭ふ梅雨晴間
梅雨晴間濃茶に憩ふ陣屋跡
流れくるゴスペルソング木下闇
緑蔭に吐息幽かなるニンフ
緑蔭やフイトンチッドを欲しいまま

早苗月

内田 恵子

梅雨深しあいまいとなる我が記憶
大昼寝宇宙の涯てまで旅をせり
傷多き膝は少年どくだみの花
そつと剃る産毛きらきら早苗月
野生馬の気品ある貌青水無月

火取虫

松宮 保人

香水の仄かな人と擦れ違ふ
長命の母に肖り梅酒飲む
金粉を散らして終る火取虫
掃へどもしつこく纏ふ蟻群団
明神や灯台眩し南風岬

きれいどこ

荒井 俱子

古袷祖の手ずれの桐筆笥
絹袷棧敷に並ぶきれいどこ
黒南風や夫は三里の灸すゑに
短夜の底に届かぬ眠りかな
梅雨深し塞ぎの虫が顔を出す

七月の山容

池田 雅夫

七月の山容空を席捲す
梅雨明の町の一天くもりなし
里山の蓋のやうなる虹二重
青柿を蹴飛ばす鶏のしぶき貌
炎天の野良手鼻かむ老農夫

まほろば

檜鼻 ことは

まほろばの駅舎を濡らす緑雨かな
たゆやかや奈良の都の柿若葉
若楓けふは唐招提寺まで
芍薬や何やらやさし仁王の眼
天平の青葉若葉を愛でにけり

夜のカメラ

正木 萬蝶

蜘蛛の囀の監視カメラに光る夜
姫著莪や舞妓は昼の貌をして
著莪咲いて名馬ひつそり世を去りぬ
青すだれ空也最中をおちよぼ口
黄泉はるか四万六千日はるか

ひとりぼっち

青木鶴城

植田雨波紋のひとつふたつみつ
ひとりぼっちの空は鈍色なめくぢり
若葉風草履ぽつんと躍り口
街宣車われ関せずとかたつむり
浴槽に凭れ見つむる黴ひとつ

順風

日高道を

鳥曇山の彼方に鄙の里
逆風を順風にする風車
青嵐バンジージャンプ視界良し
橋を行く列車の音も夏始
青あらし集団下校走り出す

鬼子母神

大塚茂子

少年の日の甘き匂香栗の花
緑濃し浅き境内鬼子母神
都電乗り俳人氣取り青ぶだう
梅雨晴間大樹くすぐる鳥の声
水たまりばかり歩く子梅雨晴間

芒種の日

福田千春

豆絞りの姐御の威勢鬼灯市
癩持ちの姉につれられ鬼灯市
嫁姑息子中立心天
蜘蛛の囿を傘で掬ふや湯葉のごと
古古古米古古米古米芒種の日

九輪草

上戸千津子

六甲の一角染むる九輪草
老鶯に山は我がもの歌謡ひ
風強し一途に歩む蟻の兵
方言に古里見ゆる夏の宵
苺摘み友と競ひし日の遠く

七夕

原田自然

背伸びして短冊吊しぬ星祭
甲羅干す亀は手酌よ秋七日
みちのくに降り立ち七夕くぐる夜
七夕や手繰り寄せたき父の魂
分校の瞳二十四別れ星

ゆすらうめ

飛永

鼓

一滴の香水に面映さあり
頬かむり結びなほせば南風ふく
ランドセルの子等群がりてゆすらうめ
屋根背負ふ貧富の差なき蝸牛
卯の花やだらりの帯の幾重にも

夏の川

井上玲子

老鷺の声訝する湖畔かな
蛇行して流れ逆巻く夏の川
山懐に釣り師脈はふ夏の川
身をゆだね来し方偲ぶ籐寝椅子
縁側に青き風受け昼寝かな

天道虫

熊倉千重子

青嵐うねり溢るる道路鏡
鳥たちの行方いづこや青嵐
葉表に絵柄を一つ天道虫
曇り空黴香うつすら古書の市
夏うぐひすペンション窓に朝が来て

梅雨の戯画

河野はるみ

床の間に威張る墨跡夏座敷
人肌のぬくもりありて籐寝椅子
野仏の膝に紅数珠へび苺
電線に恋の駆引き梅雨晴れ間
蜘蛛の囀を被ふ埃や厨隅

塚遺る角

曲淵徹雄

そつば向く裸婦像の髪夏めきぬ
整ほる代田に映る鳶の舞
卯の花や庚申塚の遺る角
花蜜柑従姉の声が浮かびくる
蛸壺の福をひき揚げ風の海

鯛焼

野口和子

庭下駄に犬の歯形や半夏生
風鈴を吊るす定位置恙なく
時の日や雨垂れ刻むひと日なり
鯛焼のはみ出すへそや麦の秋
紫陽花や人に疲れて百貨店

竹植うる 西浦 千枝子

靈峰の新樹揺るがすへりコプター
故里の流れゆるやか鮎群るる
休耕田にひまはり植ゑて子等を待つ
母を亡くせし友に一輪白百合を
竹植ゑて男腕組み高笑ひ

短夜 川崎 道子

短夜や推理小説読み終る
短夜や添寝の赤子気にかかり
短夜や楽しき夢はすぐ消えて
五月雨ややうやく背広さまになり
五月雨や地面におりし鬼瓦

貯木場 松山 清子

雲の峰かつての浜は貯木場
夏霧やこの屋根までも外国語
海のもの活き作りなる夏料理
若さとは貪欲なりし夏料理
初物のさくらんぼ食ぶ誕生日

青梅挽ぐ 石川 理恵

花著莪の群れ何人も寄せ付けず
青梅を挽ぐ幼子を遠ざけて
参拝の後の楽しみ心太
小上がりの丸木座布団とこゝろてん
曇りのち晴れのち驟雨桜桃忌

梅雨に入る 田中 章嘉

町中の竹林垂れて梅雨に入る
大木に鴉の空巢梅雨に入る
才子の避難の早さ人影に
梅雨空に銘柄米の田植とや
梅雨入りや便りの手紙しつとりと

女釣り師 松島 寛久

類染めて下戸の梅酒や婆の午後
典座の鋏に筍匂立つ
我慢して東司に立てば蛸も来て
皺の足蛸も生ける身やれ打つな
風薫る女釣り師は京ナンバー

ところてん
天城路は水音ばかり心太
踊子も食べたか天城のところてん
戦争をすりぬけし父心太
甘味処や親父はいつも心太
尻突かれ学校出しがところてん
瀬戸雄二郎

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2025年9月号

特集

「夜長」を味わう

●秋の夜 俳句セレクション 高勢祥子
●夜長と「〇〇」

「読書」津川絵理子 「音楽」浦川聡子
「飲み物」望月周 「天文」檜林弘一
「自由題」細村星一郎

クラシック 俳句界NOW 川井城子

特集 文語と口語の思考

○文語・口語それぞれの魅力 堀切克洋

○文語の思考 橋本榮治 中岡毅雄

○口語の思考 田島健一 土井探花

○文語の発想が光る、と思う俳句

島田牙城 大高翔

○口語の発想が光る、と思う俳句

佐藤智子 佐々木紺

追悼 辻桃子

岸本尚毅 稲畑廣太郎
青木亮人 小野寿子
中村雅樹 皆川燈
佐藤明彦 石井みや

「注目の句集」『名和未知男の百五十句』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
充実の投句欄



※一部変更の可能性があります。
株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

季音花

常夜灯

保坂翔太

桜まじ江戸の名残の常夜灯
義貞偲ぶ巨福呂坂や花は葉に
ライ麦や酷は余市か山崎か
万緑やどつしり座る枯山水
お化粧はをんなのいのち江戸風鈴

植田

横山君夫

噎せるほど香る一島花蜜柑
補植苗隅に浸して植田かな
村ひとつ植田の中に浮かび居り
定年や今日はいづこへアロハシャツ
一番機虹に向ひて離陸せり

梅雨茸

笹本啓子

黒南風や魚醬の匂ふ漁師町
黒南風や腓返りに目覚め居り
城壁を攻むるが如く蟻の列
梅雨晴間大道芸の剣が舞ふ
分け入れば獣道やも梅雨茸

闊達な母

石田慶子

平積みの本に湿りや夕薄暑
行列のコロッケの匂ひ街薄暑
黒塀や蜘蛛の囀揺らす三昧の音
からころと下駄突つ掛けて鬼灯市
九十の母と叔母行く四万六千日

祭提燈

染谷風子

田植唄音頭取るのは土の声
粹筋のをみな三代更衣
越中は葉の国よ鬱金香
釣られても威風堂堂大鯰
黒塀に祭提燈小夜の風

蟻の列 渋谷 きいち

蟻の列至る神社の獅子の口
石段の手摺たよりの蟻もをり
亡き母の顔浮かぶシャンソンさくらんぼ
到着ロビーハグして飛ばす夏帽子
隠れ宿四方に甘きえごの花

梅雨に入る 越田 栄子

約束を果せぬままに花は葉に
山麓に靄の立つ朝紅の花
紫陽花の斜面生き生き遊歩道
田植日を記す手書きの農曆
里山の景を深めて梅雨に入る

母なれば 梅澤 輝翠

箸置をガラスに換へて半夏生
引く潮や海辺の宿の明易し
亀の子の頭ふりふり追ひこくら
濁り鮎乳ふくませし母なれば
秩父路の白装束や夏木立

青梅雨 下川 光子

青梅雨の湖北に美しき仏様
梅雨湿り湖面息づく湖魚の群れ
江の島の駅舎にぎはふ夏燕
手枕の母まるくなり三尺寝
桐咲くや笑顔華やぐ天皇家

雨蛙 宮崎 チアキ

太古より装ふ緑この大地
青嵐勇氣百倍湧き出づる
仏壇に供ふる枇杷の色さやか
五月晴 駅階段に脚線美
雨蛙跳び付く幹に枝と化す

山の夜明け 西幅 公子

明け急ぐ山の静けさ月明り
栗の花噴き出すやうな咲きつぷり
夜の風つんと甘やか栗の花
路地裏にはや梔子の香り立つ
びよんと飛ぶ足の構へや雨蛙

五月雨 鈴木玲子

五月雨や骨董並ぶ老舗カフェ
かくかくの不如意なること五月雨なる
鬼灯市法被おやぢと青空と
得意気に大き鉢さげ鬼灯市
打水のかるた館よりひよいと来る

「江差追分」夏の海 野村美子

北の大地の「江差追分」夏の海
梅雨茸の不思議な世界山の道
黒南風や江の島の浜準備中
短夜や棘抜く夢に起こさるる
夏の夜景をロープウェイの順を待ち

短夜 高橋満耶子

折紙のかへる飛びだす青田道
古古古米に長蛇の列や額の花
左目のゴロゴロゴロと夏薊
目覺しを二度聞き逃す四葩かな
短夜や明日は締切りあと一句

明け易し 寺内洋子

短夜や夢の結末気にかかり
短夜や濃かりし夢も曖昧に
短夜の残り少なきクラス会
短夜や歎異抄など読むべきか
短夜やたまには手書きの便りなど

おたくさ 綿貫ひさの

紫陽花の小径の奥や尼僧館
七変化八十路中ばの誕生日
黄金に魔物密めく四葩かな
あぢさゐの連想先にプッチーニ
おたくさ咲くオランダ坂の夕焼かな

夏帯 山戸美子

お見合ひはこりごとりと解く単帯
夏帯をテーブルに敷き歓迎会
下下の喜びここにビヤガーデン
下戸なれど母の手作り梅酒飲む
顔花瓶に王冠のごと額紫陽花

短夜の夢

森

和子

黒南風の離島を巡る医療船
黒南風にかはらけ乗りて消えゆかん
黒南風や白亜の灯台ゆるぎなき
三日目の早朝散歩明易し
短夜の夢の一切ちぐはぐに

梅雨のひととき

菅原卓郎

船装ふ遠流の島に梅雨の星
玉葱をくくる農夫の骨つ節
黒南風や宿の帳場に船筆笥
抱き癖の抜けぬ三毛ねこ梅雨の晴
人声の絶えし植田に風生まる

夢の途中

新

暦文

ひたすらの文字に似合ひの蟻の列
失恋を蟻にあたつてコップ酒
駆け上がる千十五段夏帽子
方角は吉と出るはず早星
三尺寝夢の途中の宅急便

籐椅子

篠崎紀子

供ふるは母へ燈明青りんご
たそがれの風の帆船や風薫る
走り来て飛び込む子等や夏の川
籐椅子に朝から居りて誰も来ず
この家の長きを語る籐の椅子

紋黄蝶

池田圭子

蝶舞ふや外人墓地に銅鑼聞こへ
屋根のあるビショップの墓蝶舞へり
菜畑に追ひつ追はれつ番蝶
強風や葉から離れぬ蝶の脚
紋黄蝶遊覧船に追ひつけず

雨蛙

清水桂子

玉ねぎや知友の苦言甘辛く
改装の蔵の茶房や古すだれ
垢抜けてポニーテールの青葉風
行儀よく三つ指ついて雨蛙
書きかけの文そのままに半夏生

短夜 葛城 千世子

短夜や爺婆バレーに参加の子
卓上につつぶしたまま含羞草
「今どこ」と帰宅の遅し短き夜
次々とメール連絡夏盛ん
二十人それぞれ生ける七変化

短夜 野平 美紗子

短夜や昔のよき夢見て目覚め
与野公園亀の子泳ぐ池の中
投票日桜の下で待つ順番
背の順に並ぶ生徒や入学式
納屋に足踏み入れて気付く梅雨茸

月見草 団扇 佐々木 史 女

留守電の亡友しのび月見草
団扇では踊れぬと言ふ名取かな
築山に吾を留むる月見草
紫陽花のるり色映ゆる雨上り
誇るもの我にありしや洪団扇

夏の色 山岸 久美子

翡翠や出合ひ一瞬夢の如
装ひをこらして咲くや夏椿
麦畑黄金の海に猫隠る
老鶯の一声森の奥に消ゆ
果てもなき宇宙の謎や夏銀河

☆

☆

現代俳句鑑賞

網野月を

もう暮れる蒔萩草の赤いところ

池田澄子

〔俳壇〕6月号・夜昼より〕

夕刻に近づいて、晩御飯の用意をされている景であろうと推察する。少々光の量が少なくなり、光の色合いも変わってくる時刻で、「蒔萩草の赤いところ」も買ったとき店先で見た赤みとは異なるようだと、という日常の気づきと感慨を一句に仕立てている。赤みの差異に気づいたときに「もう暮れる」時刻を認識したと解釈しても良いかも知れない。

春めくや主旋律より水の綺羅

長嶺千晶

〔俳壇〕6月号・春の鳥より〕

春めいてきて何処からともなく聞こえてくる水の音の中に、確かに煌いている水の状態を聞き取っているのであろう。座五の「水の綺羅」は作者の確信にも似たイマジネーションの世界である。春という季節の万物が僅かに動き出す感覚が叙述されている。しかもその音の世界の「主旋律」を司っている音こそが「水」であるというのである。他に「安寧は水の如しや春の鳥」がある。

縄文のくららに乳房辛夷咲く

大瀬響史

〔俳壇〕6月号・花筏より〕

「くらら」の愛称で呼ばれることになった自立する土偶は、珍しい縄文時代の土偶である。「乳房」に象徴される生命力は、縄文と呼ばれる日本の歴史の未だに初々しいばかりの時代を背景に座五の季語「辛夷咲く」の配合が実に見事である。

梅雨激し棒立ちとなるガスボンベ

北原千枝

〔俳壇〕6月号・棒立ちより〕

読者の心が反映される句である。つまり、ユーモラスな句とも鑑賞できるし、シリアスな句意を読み取ることも出来るということである。「ガスボンベ」の何処となく人間の世界に密着したアイテムは、無機質な側面を持つていながら、日常生活の景の中にも溶け込んでいる。「ガスボンベ」のそのどちらの属性に軸足をかけるかで、景の読解が真逆になるということである。

たんぼの綿毛旅程をはづれゆく

内野義悠

〔俳句四季〕6月号・醒めて風より〕

「たんぽぽの綿毛」は気ままに飛んでいくのだと思っていた。文字通り、風の向くままである。それが、作者は「旅程」があるのだというのである。しかも「はづれゆく」というのである。気ままが故か。そうではあるまい。「綿毛」が意志を持ったものの如く、決められた「旅程」を避けて自ら「はづれゆく」というのであろう。作者は誰かを模しているのではないだろうか。少なくとも予定説に抗っている作者の心が見え隠れしているようである。他に「月容れて鏡中の風広がりぬ」がある。

水中のごとき夕暮三鬼の忌

中西夕紀

〔俳句四季〕 6月号・春の鳥より

「夕暮」の中に居る作者は、まるで「水中」に居る心地を味わっているのである。もしくは「夕暮」の中に沈む景を「水中のごとき」と形容しているのかも知れない。座五の季語「三鬼の忌」が筆者には不安感を演出しているように思われるのだが、作者の西東三鬼観はどのようなものなのであろうか。他に「呼ぶ声に目の覚めたれば春の鳥」がある。

朝の日に身じろいである桜かな

本井 英

〔俳句〕 6月号・走れば速しより

朝日を受けて少しばかり動揺している桜花である、と解釈した。その清しい姿に感じ入っているのである。桜花を朝日の中に置き、少しばかり「身じろ」がせている。これで十二分に一句になることが出来る。桜花とは偉大なものであり、俳句とは凄まじいものである。

一本の夜桜闇を奪ひけり

吉田千嘉子

〔俳句〕 6月号・啄木忌より

「夜桜」の本質を見事に描き出している。月も無く、無論街灯などもない闇夜に桜花は、光明を創り出してくれる。そんな「夜桜」の本質である。中七から座五への「闇を奪ひけり」のすっきりとした叙法は、句の品格を更に確実なものとしている。

ゆつくりと指しても虹の見えぬ母
胎児暑く火口のやうに眼が生まれ
冬蜂めりこむ泥のみるみる乾く
吹かれたら光る葦さういふことさ

〔句集「或」より〕

大塚 凱

洒落た装丁の句集なのである。そしてその装丁に合致して洒落た句が並んでいる。初めの句はお母様の視覚についての気づきを叙述している。それにしても視線の先にあるものが「虹」であることの切なさは何としたことであろうか。第二句の「火口のやうに」の比喩は作者の感性であるが、その感性を確かなものにしてるのが「胎児暑く」の客観性である。この客観性が作者の感性の確実性を担保している。

第三句は、シリアスな内容となっている。湿りの欲しい「冬蜂」は危険をも顧みず乾いてしまふ寸前の「泥」にチャレンジしたのであるが、むなく「めりこむ」ことになってしまった。実景であろうと思うが、この景から読解することは深い。第四句は登場するアイテム、「葦」がすべてである。「葦」だからこそ成立する一句である。

自選二十句

石関六弦

蝌蚪ならぶ日なたにならぶ日曜日
追ひかけて直す晴着や母の春
あらたなるいのちの知らせ梅日和
月面にいつか立つ夢巢立鳥
キヤタピラーの跡村いつぱいに蒲公英
紫陽花や路面電車はすり抜けて
羽立ててしばし間のあり兜虫
蠅たかる和菓子箱に武田菱
「種の起源」腹に抱へて昼寝かな

炎 昼 の も は や 無 口 な 理 髪 店
じ や ん 拳 の 一 度 で 決 ま る 夏 の 果
厳 格 な 父 秋 晴 の 七 回 忌
ガ ウ デ イ の 塔 よ り 高 き 秋 の 空
秋 澄 む や 矢 を 番 へ た る 黒 袴
鯛 焼 の 裏 表 な き 心 か な
本 物 の 存 外 小 さ き 福 寿 草
蜜 柑 む く あ ら そ ひ の な き こ の 国 で
鷹 の 目 に 国 境 の な き 空 と 海
真 夜 中 の サ ン タ ク ロ ー ス 右 折 待 ち
空 き つ 腹 の 横 隔 膜 へ 除 夜 の 鐘

光る星

青木鶴城

まずは新珠賞の受賞おめでとうございます。

いつもニコニコと笑顔を絶やさない、社交的な石関六弦さんだが、本人によると人から教わるのは好きではない性格であるらしい。ただ、何故か俳句は別だと言う。

司馬遼太郎の小説が大好きで、その中の正岡子規の生き様に感銘を受け俳句を始めたという氏は、独学で本や雑誌や新聞を読み、投句もしていた様である。

二〇二二年一月、水明のインターネット句会に石関六弦という名前が現れ、その名からきつとギターの名手ではないかと興味を持ったのを覚えていいる。その年の五月に入会希望のメールが入り、句会を紹介し見学に来て頂いたのだが、何といきなり下記の二句が特選。少し恥じらいながらの名乗りが印象的であった。

夏見舞少しくせある女文字
自転車をとくに投げ出し木下閣

氏は思考をする時、言葉ではなく映像で理解する習慣があり、句作も文字ではなく映像を浮かべ、その景が見えるように作る。一度詠んでしまった句にはそれほど関心がなく、万人より一人でも共感してくれればと言う。

受賞した新珠賞の作品は「音のある情景」で見事に十五句をまとめ上げた。その一部を取り上げる。

鬼の子の衣こしらへ咀嚼音
沈黙の両家ときをり鹿威し
地吹雪の中滑舌はさしすそ
風花やコンビニ包むモスキート
岐路に立つ日のルーレット春隣

糞虫が糞をこしらえ終わり、安心している様子を咀嚼の音で捉え、お見合いの席であろるか、ただただ沈黙の中に鹿威しの音でその沈黙を強調し、地吹雪で口元も凍る時の滑舌を「さしすそ」のオノマトペ。コンビニに屯する若者を排除するために若者にしか聞こえない周波数の「モスキート」を滑稽に仕立て、岐路に立つ緊張感をルーレットに例える。作者が見せたい景色や訴えたいことが見事に十七音に仕込まれている。

自選二十句より

追ひかけて直す晴着や母の春
あらたなるいのちの知らせ梅日和
厳格な父秋晴れの七回忌

作者は家族をあまり詠まなかったが、お嬢さんの巣立ちを機に家族を題材にした句が増えた。一句目は、おそらくお嬢さんの婚礼の句ではなからうかと想像する。花嫁の着物の裾を直してあげている奥様の様子が「母の春」にしっかりと込められている。「追ひかけて直す」に婚礼の緊張感を感じ取れるのである。

二句目は嫁いだお嬢さんに新しい命が芽生えたご報告である。「梅日和」がめでたさを強調する。なんともおめでた

い句である。「あらたなるいのち」の仮名表記が奏功している。健やかな成長を祈らずにはいられない。

三句目、厳格な父上ほど亡くなった後の喪失感は大きいもの。七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌……と年忌法要の度に生前を思い出すことが供養なのです。

キヤタピラーの跡村いつぱいの蒲公英
蜜柑むくあらそひのなきこの国で
鷹の目に 国境の なき空と海

たまに詠むと言う反戦の句より。愚かな人間たちはいつの時代も己の主義主張で命の奪い合いをしてしまう。人の命より大切な主義主張など有ってはならない筈なのに……

一句目、キヤタピラーは所謂重戦車のことであろう。砲弾が飛び交い、戦車が走り回る戦場にも草花は見事な花を咲かせるのである。村いつぱいに咲き誇る蒲公英と愚かな人間の対比が作者の心を映し出す。

二句目、第二次世界大戦の反省から我が国は戦争のない平和な歴史を刻んでいく。大陸とは距離を置く島国に於いても決して脅威が無くはない。作者は幸いにして争いのないこの国が、この先もずっと平和であることを祈って蜜柑を剥くのである。

三句目、鷹は鋭い目で獲物を探しながら空を舞う。その鷹の目でさえ海に有る筈の国境は見えないし、まして空には国境など見える筈もない。作者は現実にかけている国と国との国境の争いを悲しい思いで反戦を謳う。

蝌蚪ならば日なたにならぶ日曜日
羽立ててしほし間のあり兜虫
蠅たかる和菓子箱に武田菱
じやん拳の一度で決まる夏の果

ガウデイーの塔より高き秋の空
秋澄むや矢を番へたる黒袴
真夜中のサンタクロース右折待ち

作者の言う、文字ではなく映像を浮かべて、その景を文字にして行く句作りより。一句目、オタマジャクシが並んで泳いでいる。よくよく見ると皆で陽だまりを喜んでいるように目に焼き付いた。のんびりとした日曜日でなければ見えない情景を上手に捉えた。

二句目、甲虫が飛び立とうとするその一瞬に目を凝らした句。「しほし間のあり」の措辞が素晴らしい。

三句目、蠅がたかっている箱に目が留まった。よく見るとその箱には武田菱が印刷されている。多分甲府で買った土産のお菓子なのであろう。「武田菱」が句を締めた。

四句目、暑かった夏も一発で決まるジャンケンのように秋へと向かう。夏の果とジャンケンの対比が良い。

五句目、建築学科を卒業した作者はガウデイーの作品に当然惹かれた。秋空の蒼天にまだまだ伸び続けるサグラダ・ファミリアの尖塔を思い浮かべたのであろう。

六句目、弓道の景。黒袴の射手が矢を番え「的」に集中する様がしつかりと表現されている。

七句目、右折待ちなので車か自転車であろう。車だとするとオートプンカーでなければサンタは見えないだろうから自転車だと断定する。真夜中のサンタクロースが自転車に乗っている……まことに滑稽な景色である。

他にも句会での句でここに挙げたい句は沢山あるが、紙面の都合でここまでとする。

石関六弦さんは「水明」を支えて行ってくれる、光る星だと思っています。今後の更なる精進と、水明の力となつて頂けることを切に願うものです。

自選二十句

岡田宣子

初夢や幼き頃の家の間取り
大方は背広にリュック春の朝
島の風はらみ椿の咲き溢る
縄文の遺跡の空に雲雀鳴く
春の雨ゆつくり解くる蟠り
夏近し青海波透く薄造り
軽鳧の子の一羽ときをり列乱す
嬰兒の瞳に映る石鱖玉
羅の僧侶の読経堂ぬくる

紅き薔薇華やぎもどる西洋館
白壁にワンプイントの守宮かな
蝸や家路を急ぐ女たち
冬瓜を抱へシンクにどすんと置く
法師蟬ひと鳴きごとに遠のけり
風格の満つる盆栽後の月
月光や彼の流刑地の能舞台
神苑を掃く巫女ふたり神無月
「考へる人」見つめ考ふ冬うらら
寒月や深夜の保線鳴り響く
寛解の医師のひと言寒昂

原風景愛憎

網野月を

新珠賞の受賞者は毎年のように新鮮な息吹を筆者に与えて呉れる。選考を担当させて頂いて限りなく得るものが多いのである。「雪の降る町」の作者も例外ではない。五月号に掲載した選評を深掘しつつ、他の受賞作品や自選句などから作者の創作の世界を垣間見ることとしたい。

受賞作の題目「雪の降る町」は作者の原風景であろう。原風景に取材したモチーフを丁寧な描写で十五句にまとめ上げたものである。同じ景を見たり想像しても自ずと作者と評者とは異なる思いをその句に重ねているものである。どこまで近づけるか、どのように解析できるか拙筆を振るってみた。

新雪や踏むには惜しく煌めけり
雪原の小さき足跡追ふ心地
降る雪を仰ぎ騒立つ異国人
前を行く雁木の芸者お座敷へ

「惜しく」は作者の感傷であり、微細な心の動きである。つ

まり抒情句として詠まれていると解釈してよいであろう。雪国育ちの作者にとって雪へのネガティブな感情は無論あるのであるが、その句を見る限り、愛憎もまた読み取れるのである。続く三句も同様に完全な叙景句ではなく、作者の心境が前提になって詠まれている。「小さき足跡」は動物の足跡であろうか。「小さき足跡」を追ってみたい心持ちに作者がなったと解した。「異国人」は南国人であろう。「仰ぎ騒立つ」から推し量れる。「芸者」は雁木に雪を避けているのであろう。ただその想像は作者の想定であり、確証はないのである。それだけに抒情の部分が少なからず句から感じ取れるのである。雪国の習いを句に込めていると筆者は考える。

雪見障子に地酒は旨し越の宿
ぼた雪に見る見る沈む町明り
早暁の除雪車響き町目覚む
賑賑と落つる雫や軒氷柱

きわめて抑制された表現がのぞいているようである。「旨し」は作者の主観的感覚を前提とした表現である。「見る見る沈む」は「灯り」の景を叙して「灯り」を有機的な主語に昇華させている。「町目覚む」は明らかに「町」を擬人法的に扱っている。「賑賑と」は、雪の晴れ間の事でもあろうか。暖かさを誘うのであろうが、筆者のような他国者にはそれでも寒さが伝わってくるようである。

多様な構成の句が並んでいる。十五句と言うキャパシテ

―を縦横無尽に使いこなしているように感じるのである。

朝市の訛に和む 六花
豊穰をもたらしいはれ雪解水
妙高山の雪形見よと指す農夫

「訛に和む六花」は言い得て妙である。「和む」は作者を主語としつつ、座五の季語「六花」にも関係して解釈したい。「豊穰」の句と共にこの二句は十五句の中で筆者が最も好きな句である。「いはれ」は作者自身の感傷を超えて雪国に暮らす人々の願いが込められている。座五の季語「雪解水」への感慨の在り様がそうした人々ならではの本質を捉えている。同時に作者の感慨であることは疑いの余地のないことである。

「雪形」の句は雪と共に暮らす人々の知恵の集積であろう。農夫に手柄を独り占めさせておかなくても良いかもしれない。

原風景への愛憎は誰でもあるものであろう。愛惜と憎悪は時に相反するものではないのである。愛惜と憎悪は、原理主義的にどちらかに偏るのではなくて、よく言えばバランスをとっているのであり、難しく考えると何とも厄介な思い入れを孕んでいるのである。その厄介な思い入れは、科学の力では解析できないものである。詩のかたちにして、はじめて言葉にすることが出来たのである。その思い入れがこの十五句にまとめ上げられたのである。

加えてこの度の自選句には実に秀句が多いのだが、その中から紙面の関係で数句を鑑賞する。

春の雨 ゆつくり 解くる 蟠り

「春の雨」は早春のそれを想像した。根雪を解かす早春の雨

である。斯くの如く人間関係においても「蟠り」を解かしてくれる「春の雨」を希求する心情を込めている。

冬瓜を抱へシンクにどすんと置く

この句の出来る時空（句会）に居合わせたように記憶している。第一印象は、何とも大雑把な表現ではないか、であったのであるが、こうして読み直してみると佳句であることがわかる。

寛解の医師のひと言 寒昂

座五の季語「寒昂」はどのように解すればよいのであろうか。際立った寒さを感じ取ればよいのであろうか。筆者は極まった寒さの中にも、明瞭に見て取れる「昂」を思い描いた。「寛解」の中に安心感を見出しつつ、それでいて医師の用いる複雑な表現であることの気づきを作者は、「医師のひと言」として受け取ったのではないだろうか。一つの感情とまた異なった感慨のないまぜになった心境を詠みつつ、「寒昂」に託した思いを読み取ろうと考える。

秋めくや少し太めの眉を引く

これは二〇二一年八月一七日の蝌蚪の会での出句である。今の作者の俳句作家としての影貌が見え始めた頃のように考えている。俳句的に表現するというよりも、まずは景と事柄を俳句的に切り取ることに成功しているからである。無論、表現は上手に越したことは無いのだが、それ以上に景と事柄を俳句的に切り取ること、つまり俳句的に把握することが肝要で、作者は十二分にその境地に迫っている。

自選二十句

菅原卓郎

開眼の達磨燻るどどかな
一本のながき眉毛や老の春
梅東風や明けて半寿の二従姉妹
春北斗石に銘ある古罌かな
切株に山焼き人の小昼かな
ミモザ咲く入江の里の海鼠壁
行き雁の宙に北斗の標かな
絵馬堂へ絶えぬ人跡涅槃雪
花散るや標本木に御礼肥

緋桜や墨の香つよき朱印帳
眼のひかる檻のライオン夏の月
夏の宵一羽もどらぬ伝書鳩
口伝ての開墾悲話や麦の秋
夾竹桃盛る河口の潮どまり
跂望する富士の入り日や破れ案山子
秋燕見送る海人の孤舟かな
赤べこの頷く風や吊し柿
猪をさばく孤老の武勇伝
初冬や朱塗の椀のくずだまり
絵看板変はる名画座冬に入る

「再現」か「象形」か

網野月を

本年度新珠賞受賞者・菅原卓郎氏へエールを送りたいと思う。応募作品二十三作品のなかで、受賞作に選考されたものであり、その力強い表現とアイデア溢れる句作は注目に値するであろう。

「とりびあ」の表題は意表を突いていた。このような設定の十五句を詠ませてもらえとは幸せである。何れの句も豊かな着想から作句された句で読み応え十分である。切れ字の用法、リズム感、いずれも秀逸である。

この作家は、「象形」の句作りに取り組み始めているように考える。叙景句を基本的な作法に据えながらも、かつての体験や思索を巧みに取り込んでいるように思えるのである。そういう意味では「再現」の部分も加味されているのだが、景を前にして作者はその景の中から表現に必要な部分を抽出して句を構成する。換言すれば、吟行に同行した他者とは景から抽出した要素の品揃えが異なっていて、自ずとオリジナリティのある作句となるわけである。

海境へ水脈のひとつ初茜
野仏にめをと遍路の片合掌
陰膳に雪花菜の小鉢ほけの花
山の端のかすむ遠嶺大夏野

「ひとつずの水脈」としないで「水脈のひとつず」としたところに航跡の未だに伸び行く動的な景を想像した。初日の出を拝もうと海浜に出かけた作者の目に映ったものは元日から漁に出るマグロ漁船が東へ向かう姿であろうか。筆者の勝手な解釈であるが、然程間違っていないかと思う。

お揃いのさんや袋を首に掛けて、これもお揃いの金剛杖をついている。どうして「めをと」だと分かったかなどと野暮は言わないものである。金剛杖を持ち替えて、利き手で「片合掌」しているのである。

木瓜の花は晩春の季を表現しているのであろう。旅中の方のお好きな花であると共に「雪花菜」もまたその方の好物であるに違いない。「とりびあ bird」の本意に近いのかと思われる。

眼前の「大夏野」と遠景の「山の端」の一幅の画布になるような景である。叙景句に徹している句で作者の本来の句風に極々近い。ただこの一句には視座の置き所として作者が介在していて、景を決める際の作者の心境まで遡上することも出来るかと考える。

学僧のそそと崩せり冷豆腐

十二様まつる背山の夏深し
可惜夜の棟梁うなる祝儀唄
成金で挑む王手の良夜かな

「そそと」は作者の眼力で、そういうことから言えば百パーセント叙景ではないのだが、句作そのものが作者の体験の興味での再現である。「十二様」と「青山」の取り合わせはこの作者には珍しい。無論実景であるのだから、故意に取り合わせたのではないのであろうが、座五の季語「夏探し」が艶めかしく感じる。「夏探し」の事実ではなく、作者の感受性と考えれば納得がゆくかも知れない。

「棟梁」が「祝儀唄」を歌っていると解した。婚礼とも考えられるが、上棟式つまり建前の祝宴を筆者は想定してみた。新木の香の何とも心地良いことである。「成金」の正体はなんであろう。銀将や桂馬ではないだろう。多分、歩兵であるつまり「成金」はと金なのである。満ち欠けする月に擬えて解するとまた奥深さを感じる。

糸底のゆがむ徳利や今年酒
灰均す寺の香炉の小春かな
片時雨よぎる町家に在釜札
崩し字の画賛したため寒見舞

注いだと同時に「糸底」の歪みに気づいたのである。「今年酒」を楽しんでいるのであって、「ゆがみ」もまた肴になったに違いない。上五の「灰均す」がこの句の肝である。秋

の好日、人出も多くて、「香炉」を整えるのにも二度三度と手間を要しているのであらう。「本日在釜」の札が門扉に掛けられている。何とも古風な風でもあり、現代にも息衝く慣例なのではないかと思われる。この「寒見舞」のはがきは自画自賛ということなのであろう。そこで上五の「崩し字」が効いてくる。なかなか良い趣味のはがきを頂戴したものである。もしかしたら作者が送達したのかも知れない。今月号の自選句は秀句ばかりである。紙面の関係から二句を選んで鑑賞する。

ミモザ咲く入江の里の海鼠壁

この句は叙景に徹した句である。「ミモザ」の花色の見事さと「海鼠壁」のこれまたくっきりとした印象の意匠がコントラストを見せている。

夏の宵一羽もどらぬ伝書鳩

こちらの句は「一羽」にどうしても句の訴えようとする意味を読んでしまう。

「再現」か「象形」か、という標題を付けた。人間的体験の中から思索する「再現」と、演繹的に考案する「象形」とすればわかりやすいかも知れない。

作者の作風は一読、叙景句として捉えられるであらう。しかしながら「象形」的作法に滑稽と諧謔、かる味とアイディアを加味したような特徴を有しているように筆者には思えるのである。これからのような俳句を読ませてもらえるのであろうか。勉強させていただきたい。

『水明誌』を繙く（水明六月号）

田島健一（「炎環」同人、「豆の木」「オルガン」所属）

手鏡の光の合図めかり時 山本鬼之介

「めかり時（目借時）」は晩春の季語で、「蛙の目借時」ともいい、春の暖かさのなかで眠くてたまらない時候のことを意味する。

眠りのなかへ沈んでいきそうなとき、ふと辺りの光が動き、手に持った鏡がそれを反射した。それが思いもかけず何かの「合図」となったのである。

山で遭難したときなどに、自分の居場所を知らせるために、手鏡に光を反射させることがあるというが、まさに掲句の「合図」もまた、あたかも「自分の居場所を知らせる」かのよう

に、光を反射したのであろう。
決して意図しない一瞬の光の反射が、何物にも先駆けて「合図」を生み出した。それは「誰か」に向けた「何か」の「合図」に違いないのだが、そのような説明よりも先に、いま眠りに沈んでいく作者の存在を真っ先に告げる。

この「合図」は、「手鏡」と「めかり時」との間に生成された「偶然」に過ぎない。だが、その偶然が、これほどまでに読み手の目を惹きつけるのだから不思議だ。

筍を獣と分かつ夕餉かな 鳥羽和風

「筍」は春の季語。土から顔を出したばかりの新鮮な筍は、自然の恵みと生命力を象徴する。

「分かつ」は、「分ける」「区別する」「共有する」「分配する」など、いくつかの意味を含むが、ここでは、「共有する」の意で解釈したい。

筍栽培における獣害被害の大半は猪による食害だそうだ。

掲句は、そのような「獣」と人間が、「筍」を「共有している（分かつ）」と言う。ここでは人間側の事情は保留され、自然界の住人である「獣」との対等な関係性が示唆される。

よく知られているとおり、筍の皮には獣の肌のように薄すらと毛が生えており、それを茹でるときは、旨味を逃がさないために内がわの柔らかい皮はつけたままで茹でるのがよいと言う。どうやら春の筍にも、獣のような「野性」が包み隠されているように感じられる。

人間世界の「夕餉」は家族や親しい人々が集う穏やかな時間であるが、一方でそれは「筍」や「獣」から享受した荒々しい「野性」によって支えられているのだ。

山本鬼之介 選

水明集

流鏑馬や南無八幡と矢を放つ

夏めくや田に入る水のきらきらと

夏立つや汗こらへ見し紙芝居

夏めくや夜空の星のにぎやかさ

山吹や賽銭入るる音に揺れ

山際を包む安らぎ若葉時

山峡の青田波打つ誇りかな

夫逝きて庭木いよいよ茂りたり

高空を急旋回や夏つばめ

水口に思ひ掛けなき目高かな

利根 倉田星歩

若狭 岡本祥子

新麦や郷土自慢のおきりこみ
東雲の卯の花垣の庵かな
錦絵と見紛ふばかりつつじ垣
江ノ電を挟む紫陽花雨に咲く
椎若葉小さき社の屋敷神

新茶汲み娘の話まるくなり
白薔薇の一輪だけの和室かな
薔薇の昼倦怠感の仄見ゆや
夏霞見知らぬ街に迷ひ込み
夏椿余生華やぐ同窓会

柏餅葉表包み裏包み
白き花一輪卓に今朝の夏
新麦や強力薄力デュラムセモリナ
烏賊釣火また一つ消ゆ能登の海
夏掛けの折目馴染まぬ新しさ

新緑の杜の深さを奥社へと
緑さす讚美歌洩るる礼拝堂
緑蔭の木洩れ日明か塩の道
遊園地吾子を見守る白日傘
風力発電やませに押されフル回転

さいたま

反町 修

菅原真理

小林京子

岡田宣子

さいたま

皆川更穂

千年を駆くる走馬や諸鬘
宵宮や巫女は芳紀の十五歳
何処より草笛仄か里の夜
静謐の常磐木落葉獣道
しんがりは草笛吹きの大男

霜多光代

しづしづと双葉葵の牛車かな
信濃路の何れも美しき夏野かな
紀の川の小波尽し初夏の光げ
草笛の水面ゆらして息深し
若夏の幸魂蔵す王の墓

森下山業

麦笛やふる里と云ふ知らぬ町
薫風に白煙あがるシステイーナ
駄菓子屋は昔の置屋夏つばめ
母の日や浅間烏帽子はDカップ
雪室に銘酒を醸す九夏かな

田中弘子

短夜や遠き貨車の音続きをり
万緑に部活の子等の吸ひ込まる
万緑や大さふかひれ古稀の膳
洗ひ上げ角立つシート夏初め
懷に観覧車抱き山若葉

さいたま

寺町知子

桜葉ふり扉ささくれたる祠
春灯下源平咲きの浮かぶ路地
空き缶ひとつ土産の蛸蛸となりけり
春昼や身じろぎもせぬ亀の首
劇場の椅子の手触はり春の宵

飯田忠男

黒穂抜く親の仇の如くぬく
さわさわと靡く穂先よ麦畑
農道の深き轍や墜栗花雨
田植機の出番が終り鷺一羽
三尺の老幹を伐る夏山路

綿引まりこ

運命を受け入れ歩く花の道
病窓の樹々の煌めき聖五月
信頼の医師と手を組み夏の嶺
言霊の溢るるばかりソーダ水
夕風や怒濤の日々は過去となる

元田亮一

新麦や微かに響くロングトーン
幾重にも花占ひの薔薇かな
冷や酒を幾度も掛ける慰霊の碑
椎若葉施設に入るとの便り
紫陽花や足湯から見るかな女の碑

緑さす巨樹の天蓋鬼子母神

越谷 阿部幸代

大阪 遠藤人美

さわさわと麦の波寄すかくれんぼ
ひと時をひとり味はふ新茶かな
柿の花こぼれにこぼれ茶舗の前
此は楽園薔薇咲く庭の老夫人

修験者の辿る山路や濃山吹

平塚 丸屋詠子

春愁頬杖つきて中也の詩

さいたま 石黒由美子

夏雲や足の三里を圧し山路
ためらはず中天めざし夏の蝶
若竹や参拝客を鼓舞したり
シュールアートの首を傾ぐる木下闇

春愁や苔むす武者の五輪塔
白き蝶命眩しき狂ひ舞
白鷺や海へ傾ぐる千枚田
島旅の宿の一献鮑刺

国道のT字路のさき青田風
我さきに群がる鯉や青嵐

さいたま 石関六弦

母の日に届きし菓子を古伊万里に
銀ぶらや白シヤツ羽織り軽やかに
幼な子の赤きくつ下蝶を追ふ

東京 畑宮栄子

色白の転校生や夏来る
五月雨や猛き二本の御神木
風薫る菌ブラシの柄の透きとほり

蝶の舞ふ川原で憩ふ老夫婦
新樹光語らふ二人包みをり

ひるがへり住処を捜すつばくらめ
里人の急坂降り来溝浚へ

本橋稀香

逸早く種子島産新茶買ふ
本栖湖の見えざる富士や夏霞

さいたま 森下美智枝

夏めく街手足すらりと少女らは
幼虫のおが屑まみれ兜虫
出色のやちむん大皿初鰹

コンサートの余韻にひたり夏の月
亡き人の丹精込めし薔薇みごと
クラス会いさき五匹を完食す

夏さざす時に足をそそられて

さいたま 秋谷風舎

美帽子にバラソルをさす婦人かな

緑蔭や標本木の気高し

黒鯛の通ふ学校浮子の下

日頃から茶葉は狭山よ柏餅

主人去り庭埋め尽くす十葉よ

緑蔭の吊り橋渡り隠れ里

轟音のダム湖放水二重虹

ダム湖底眠り納むる緑蔭よ

和解待つバツハの響き風薫る

稲野幸子

みどりの日野菜の見えぬセルフカレー

器量良き緋鯉の白やみどりの日

満員のお堀の小舟みどりの日

みどりの日バナナシェイクに青さ無し

お茶漬けの黙り安らぐみどりの日

吉川拓真

五月来る背中に馴染むランドセル

ガラス器の触れ合ふ音や夏めきぬ

名水に沈む饅頭夏さざす

燕の子母の乳房を探しをり

下校児を見送る教師燕の子

若狭 山崎郁子

吉川 杉浦千祐

山頂へ山吹の道友眠る

山吹の白を揺らして乳母車

男の子とて八頭身に初節句

文の末書けず屑かご五月闇

贈らるる深紅の薔薇に感謝メモ

音出ぬもせめて笑顔で草笛を

逆走の車の事件子供の日

草笛を吹く夫撮るやかつこよく

雨粒や琴の余韻を初夏の夕

さいたま 小川洋子

日傘揺る濠の光をすくひ取り

庭園の色に埋もれつ差す日傘

緑蔭や名草咲き初め寺の裏

緑蔭や風雅沁み入る石畳

緑蔭や美術館出で深呼吸吸

前田夏野

時告ぐる小江戸の鐘や風光る

畑残し逝きし農婦や葱の花

母真似て化粧する子や紅の花

磯笛は命の笛や鮑海女

触れ太鼓響く両国五月来る

大熊健司

苦も楽も抱きしめ散りし桜蕊
散る蕊や残る蕊だに愛ほしく
遊歩道舞ふ桜蕊髪飾る
友と会ふ桜蕊降る朝の九時
談尽きぬ桜蕊降る街角や

さいたま 榎本道代

夏めくや炭酸の泡きらきらと
夏めくや長寿願ふもジョッキ干す
筍を掘りて思案の調理法
地下足袋で筍探る足占かな
エアポート夏めく海へ一つ飛び

さいたま 北出久美子

洋館の妙な洋風釣り忍
サンガラス伊達の魅力を出し切れず
夏休み児らのスマホの鳴り止まず
窓全開家族昼寝の里に住む
宿題を打ち切り児らは兜虫

香田裕誌

水を得て田の生き生きと五月来る
若葉して千古を今に古墳群
廃線の駅舎古りをり竹の秋
柚子の花散る農道の潦
老鷺に心あづけて露天風呂

白岡 岡本和男

夏近しビルの狭間に抜くる風
山若葉七半吹かし七曲り
幽玄界へ誘ふ摺り足薪能
白鷺や白を浮かぶる小糠雨
麦秋や鐘輕やかにカテドラル

湯浅 和

たすき掛け明治の祖母や蓬餅
蒲公英や被災の跡のモニユメント
山峡の八十八夜の共同湯
たんぽぽや午睡の赤子笑ひをり
朝の庭生まれたてなる春の蝶

さいたま 阿部貞代

風光る茶室を出づるエトランゼ
棟上の唸るクレーン風光る
覚えたての校歌あやふや葱坊主
海士の手に龍宮みやげ大鮑
パレットにきみどり緑五月来ぬ

上尾 室井早都子

手を焼きし吾子にまもられ夏隣
桜蕊ふる石段を「グリコ」して
空知らず鳴かず飛ばずの蝌蚪泳ぐ
桜蕊ふり体操はトランジスター
襲名のラップ入場春の雨

平野 楽

気まぐれな電波時計や夏来る

さいたま 川島夕峰

若狭 松村笑風

テーブルに一人ぼっちの柏餅
寄り添はず直立不動チューリップ
パステル色の帽子舞ひ上げ桜まじ
夕薄暑父の釣竿漆塗り

御所人形の目元すずしき端午かな

小野町子

鳥帰る搭乗口の親子かな

畠中風花

金太郎の腹の「金」の字子供の日

日輪弦月の兜飾りし四畳半

菖蒲葺く徳川園の冠木門

粽結ふ楚の屈原におもひはせ

青田時昼寝のあとのひと仕事
にぎり飯食うて大の字青田風
藻に遊ぶ目高見つむる初飼育
女子サッカー残り五分や法師蟬

吊り草を持つ落語家の夏羽織

播磨 進

森下風湖

風薫るミニスカートとマスコット

麦の秋紙飛行機を飛ばしけり

雨上がり苗に隠るる源五郎

豊作を祈りて庭の花みかん

たんぽぽの綿毛は風を追連れに
大空を踏んで苗挿す皐月の田
詰め襟のボタン外して初夏の風
約束の明日待ち侘ぶる夏帽子
父と子の初挑戦や山開き

進まざる昼のドラマの薄暑かな

東京 山中いちい

西川昭代

ひっそりと猫水を飲む薄暑かな

西郷像の目線を辿る薄暑かな

剣祀る熱田の宮に夕薄暑

薄暑かな金の鯢鉾反り返る

昼夕は里にメロディ夏きざず
新茶汲む湯呑みに透くる天の色
父母がしきりに恋し夏の月
佳き事を拾ひ集めて里若葉
女子会やお喋り尽きぬ夏鴉

行く春や使ひ終へたる弁当箱
行く春を追ひかけ涙あふるる道

夏帽子デッキの風に奪はれし
そぞろゆく繋ぐ手柔き春の宵
夏きざし弓引く乙女の遠まなざし

友来たり新茶を淹れて小半日
通学に慣れし子等へと若葉風

美術館出でて上野の若葉風
夏立ちて履き替ふる白スニーカー
夏場所や白塗美女を追ふカメラ

いたはしや新茶の封あけ句を詠まむ
表参道見えぬ風ふき若葉冷
足ることを知らざるやうな若葉かな
ままならぬ日々に褒美の新茶かな
川底を見せぬ浅瀬を蛇泳ぐ

夏めくやつなぎ姿の兄始動
夏めくやトラクター今発進す
夏めくや山里順に着替へ中
水色のブラウス選び夏めく日
ジャムにする実梅秤に山積みす

若狭 佐野友夏

川口 木村小麦

新井のり子

さいたま 緒方みき子

土起こし住処追はるる蚯蚓かな
母の日や詩吟の小節流れくる
畔草を刈る手休めて青葉風
輩としばし憩へり楠若葉
万緑の中から白き新夫婦

木の香立つ丸太の椅子や五月来ぬ
文塚をもつれ飛びかふ蝶の恋
讚美歌に始まる拳式風光る
ほんたうの空の碧知る聖五月
三陸の水を撥ね上げ鮑取り

公園に早やチャイム鳴り夏来たる
サングラスかけて地下鉄乗り過し
緑色濃淡染めし新茶かな
菖蒲田に畔道ゆづる人の影
ボール追ひ顔も手足も日焼かな

緑蔭に薔薇色の子ら睡る午後
緑蔭や鯉跳ぬる音訝する
緑蔭のベンチ枕は本二冊
日傘閉づ白き腕とシプレの香
旧き友日傘差し掛け歩を合はせ

さいたま 太田 貴

六戸 洋子

東京 柳父はる

さいたま 横山 礼子

春の旅座席譲られ歳を知る

さいたま

伊藤美津子

聖五月「平均律」の満つる午後
釣り糸も流るるままに青嵐
眉メイク左右不揃ひ五月憂し
雨戸引き終止符打つや夏夕べ

東京 清水美千子

溜め息もさらつてくれよ青嵐

小田三茅

青嵐やはつと真紅が枝の先

決断は中庸となり夏至の夜
緑蔭に噂話を楽しめり

さいたま

糸井しるく

ざわざわと心と木立青嵐

艶失せて機能重視の黒日傘

大空を塗りつぶすかな青楓

緑蔭やozoneを胸に膨らませ

ニューフェイスしどろもどろの初夏の朝

里山の緑蔭の風なびく頬

孫は来ず妻と六日の柏餅

駒谷行雄

キャンブで知るマジックアワーグラデーション

和歌山

嶋田洋子

夏の畑主役を競ふ茄子と瓜

砂まみれ手応へありぬ潮干狩り
散り牡丹色香残しつ地を染むる
童に囲まればあば兜折る

女のやうに日傘男も差しをりぬ

紫の世界に溶け込む藤ロード

初燕良きことありや宝くじ

形見の帯灰かに古茶の香りあり

万博や思考は未来夏さざし

小山あつ子

少年の立ち漕ぎ眩し麦の秋

母の日や我が手の皺に妣を偲ぶ
ふらここで飛び出す世界青葉かな

さいたま

鈴木香音子

黒々と悪夢残りて明易し

青紅葉日日重なりて闇を抱く

夏祭いなせ漢のふくらはぎ

舞ふ若葉ふはりと土の香る中

煌めきて密度増したる夏の朝

子供来て皺もほころぶ母の日や

朝の服新茶の香健やかに
新茶汲むしづく一滴最後まで
老の身に今朝も目覚めの新茶かな
移ろひて若葉の薫る道楽し
山鳩は姿を見せず若葉陰

川口 田村福美

名工の茶碗大盛り浅蜷飯
露や陽差し遮り街暗し
自転車の学生の背に若葉風
ジョギングの火照る体に若葉風
強風に路を転がるおほでまり

さいたま 武田重子

夏めくや染付皿の薄造り
夏さぐす妻の髪型短めに
夏めいて恐る恐る乗る体重計
夏めきて胸元眩しVカット
夏めくや嘴広鶴が飛んでいく

さいたま 北山建治郎

夏めくや喜怒哀楽を素のままに
夏に入る父の生家は移住者へ
寺カフエのオープン記念夏めく日
青梅を指差し探す親子かな
青梅の産毛輝き水に浮く

所沢 飯室夏江

セルを着て母美しく老いたまふ
麦の秋空缶ひとつ駅ホーム
露むくや夫と言葉をかはしつつ
葉桜や風吹き抜けて赤子泣く
夫婦仲さらに深まり古茶淹るる

大阪 海老名ノルン

学帽に白カバー着け更衣
衣更へて子等逆立ちをやつてみせ
思ひ切り捨てるがよろし更衣
退院日眩しかりけり柿若葉
柿若葉昇格鬱うつと闘へり

さいたま 門真宏治

つつじ咲く口笛吹きつベダル漕ぐ
古茶飲みし古き良き友語り種
古茶好む作家偲ぶや美術館
鯉職世界の空へ羽ばたけよ
カンパする平和の礎築く春

和歌山 南條きわゑ

母の日や見様見真似のそば饅頭
塾生の頭に触るる柿若葉
更衣めつたに着ざるワンピース
紫陽花や犬と揃ひの雨コート
紫陽花の色濃き一枝所望せり

三浦真由美

柿若葉漏るる光の柔らかし
四十年の喜怒哀楽や柿若葉

さいたま 木谷葉子

よそとせ
よそ行きの同窓会や更衣
更衣母の家系の猫背かな
更衣母の仕立ての馴染みたる

薫風を器にもりつけ鄙に住む
花は葉に平成は令和に卒寿なり
指定席の無き故郷や蔦青葉
波にのせ子孫を放つ月夜の蟹
てんと虫慣性の法則ありにけり

山下ユリ子

夕虹や見知らぬ人に教へられ
夕虹やつながる会話橋の上
旅の子の地球儀回す立夏かな
葉桜や静かに進む車椅子
皺伸ばしTシャツ吊す風呂場かな

藤沢 小島喜代子

芝桜富士の来光出迎える
太陽とひまわりだけが道しるべ
菜の花の黄色と共に戯れる
五月晴れ親子がつなぐ芸の華
真夏日が季節はずれの昨日今日

東京 桐山遊童

母の日や母似の人に席譲る
新樹光検査結果の異常無し
新緑や画布にさみどり塗りたくる
白日傘蹴で砂を感じつつ
緑蔭に座り葉の声鳥の声

さいたま 羽島秀子

君のいふ桐の花咲く酒屋跡
朝夕の一声かけてオクラの芽
背くらべパコえさうな子供の日
母の日やカーネーションの鉢を替ふ
爪ほどの卵がら落つつばめの巢

鬼石 柿原聰子

屋形船揺れて川面に朧月
朧月「またね」と友言ひしまま
花衣互ひに褒め合ひ若作り
春の宵結びのギフト「QRコード」
窓際の小さいさくめる桜草

さいたま 田口文子

水底に石段見ゆる麦の秋
行く春を貝のうんちく聞きながら
目覚めては夢へ寝落ちの朧かな
畦道を順順に来て薪能
あのシテは隣村の子青田風

横浜 石井妙子

「みーちゃん」がおんもで遊ぶ麦の秋

さいたま 鈴木藻好

悪戯を追ふ百姓や麦の秋

年寄りの青空コーラス麦の秋

枝折り戸を開くれば揺るる鉄線花

鉄線花生垣を分け居所となす

駿河より届く新茶と心意気

宮代 関谷多美子

土佐山峡の新茶清らに翠香る

相馬焼夫婦湯呑に汲む新茶

聖五月前女前高交流会

「夏になつたなあ」夫やうやうに恢復期

鳥の群れ潜り顔出す薄暑かな

東京 深沢りこ

掘り起こし抜けし笥友の笑み

掘り立ての筍汁や義兄あに自慢

クレーンを見上げ散歩の薄暑かな

ゆつたりとたゆたふ雲や墓参り

緑蔭の送迎バスのアンパンマン

さいたま 樋口元美

モネのやう日傘をくるり街歩き

御朱印の列は日傘の白まぶし

油頭すわとうの日傘にチャイナドレスかな

柔らかき光まとひて柿若葉

さいたま 今西 操

久々に訪ぬる庭に柿若葉

緩む風色七色に更衣

店頭で抱へし青梅地産物

里山の風が運ぶや虫の声

所沢 関根千恵

ブロンスの少女靴脱ぐ秋麗

思ひ出は掌にいつぱいの秋の旅

少年の指先留まる秋茜

新緑のグラデーシオン陽に輝きて

さいたま 三森恵子

江の電降りあぢさゐの道歩きゆく

鰯一本釣り夏感度満載

蜜蜂に攻撃喰らひ藤揺れる

東京 中村まどか

母の日に母が寝込んで母慕ふ

作品鑑賞

山本鬼之介

流鏑馬や南無八幡と矢を放つ

倉田星歩

この句に触れて、筆者宅の書棚に流鏑馬に関係した本があったのを思い出したので探してみたら、「小笠原流・流鏑馬―やぶさめ―」という写真集が見つかった。この写真集は、二〇〇〇年九月に初版が発行されており、著者は、細野喜由という趣味の写真家で、三十一世小笠原清忠宗家が監修している。著者が鎌倉で流鏑馬を見たのが切っ掛けで、それ以来小笠原流に同行して全国各地で開催の流鏑馬を撮り続けたと記されている。筆者がこの写真集を何時何処で買い求めたのか記憶にないが、裏表紙に著者の直筆と思われる流鏑馬の矢の絵と著者のサインがあるので、著者との距離がとても近く感じられた。

さて、流鏑馬を解説するにはページが足りないのでは割愛するが、本来は弓馬術からなる武家礼法を基本として今日まで受け継がれてきたもので、掲句が発する迫力と緊張感の矢に我が胸を射貫かれた思いである。近くでは東京浅草の流

鏑馬、そして、神事としては、京都・賀茂御祖神社、栃木・日光東照宮、鎌倉・鶴岡八幡宮の流鏑馬が、その格式と伝統を護り続けている。

山峡の青田波打つ誇りかな

岡本祥子

若狭水明会の会員諸氏や鳥羽谷俳句会に所属の方々が多く居られ、昔から「鳥羽谷」と呼ばれている風土を詠んだ俳句であろうと思う。JR小浜線の線路を挟んで両側に山並があり、山裾にそれぞれの集落の営みがある。今は無人駅になっているが、昔は何人かの駅員がいて栄えた大鳥羽駅を軸として、上黒田・大鳥羽・長江、そして向い側の未生野・三田・小原・山内など、筆者が疎開していた頃と替わらぬ地名であるし、鳥羽谷に広がる豊かな田園風景も同様である。四季折々に変わってゆく景色に、そこに住む人々の心が潤い、穏やかな日常がある。筆者は勿論、この地を訪れる人々も然り。

鳥羽谷の田植の後の苗が順調に育ち、青田となって人々の眼を充たしている。青田を渡る風が実に心地よく、いま作者は、天守から人里を眺める殿様のような気分になっているのではなからうか。生まれ育ち、人生を共にしてきた此の地に限りない愛着を持って接している作者の気持が「誇り」という言葉になったのだと思う。

東雲の卯の花垣の庵かな 反町 修

卯の花はうつぎ（枝が中空なので空木）の花の略となつて
いるが、佐々木信綱の作詞による唱歌「夏は来ぬ」の「うの
花の 句う垣根に…」の歌詞で子供の頃から耳に残っている
花である。「卯の花垣」は季語「卯の花」の傍題になつて
いるから、その花とともに臨場感のある景色を読者の目に示し
ている。清楚な卯の花に夜明けの光が射した生垣。まだ床に
就いて居るであろう家人は、どのような人物なのであるうか
と興味をそそる俳句である。

夏霞見知らぬ街に迷ひ込み 菅原真理

朝から霞がかかり、今日も暑くなりそうな空模様である。
最寄り駅から目的の駅まで電車に乗り、駅を出た時、作者は
違和感を覚えた。前にも来たことがあるのに何故か初めての
ような気がした。霞のせいなのか、それとも自分の頭に疲れ
が出ているのかと、不思議な思いを抱いた日であった。

烏賊釣火また一つ消ゆ能登の海 小林京子

夜間水面に近づいて灯を慕う烏賊の習性を利用して、沖合
で眼が眩むような集魚灯を点しての烏賊釣漁である。浜辺か
ら遠い沖合の烏賊釣火を見ていると涼しさを感じ、時間の経
過とともに消えてゆく灯火に一抹の哀愁を覚える。いろいろ

と悲しいことや辛いことのあった能登の海なればこそその思い
なのであろう。

新緑の杜の深さを奥社へと 岡田宣子

掲句の雰囲気から、本殿そのものが高所にある格式のある
神社を想像する。正殿で敬虔な祈りを捧げた後、そこからま
た山路を辿り奥社へ向かう。連れの人は、本殿までが精一杯
で、木蔭で休んでいるのだろう。空が見えぬほどに生い茂つ
た新緑の樹木の径を踏みしめて行く作者の顔に汗が滲む。

千年を駆くる走馬や諸鬘 皆川更穂

五月十五日に京都で開催される賀茂祭（葵祭）で、勅使や
神職、役人などが身に着ける冠や烏帽子、牛車の飾りなどに
双葉葵と桂の枝を組合せて飾るのを諸蔓（もろかずら）とい
う。まさに賀茂祭を彷彿させる装飾品である。上五から中七
にかけての措辞は、平安朝から現代まで、京都の千年に余る
歴史の一齣一齣を走馬灯に託したものと解釈したが如何であ
らう。

信濃路の何れも美しき夏野かな 霜多光代

国語辞典を開いていると、頭に信濃の二文字が付く言葉が

沢山出てくる。信濃路もその一つで、直訳すれば旧国名の信濃即ち長野県の道及び長野県に通じる道ということであるが、この俳句の句意から察すれば、当然前者ということになる。筆者は信濃路について明るくはないが、安曇野の景観を思い描けば掲句と合致する。

麦笛やふる里と云ふ知らぬ町

森下山菜

数十年ぶりに生まれ故郷の町を訪れたが、今では知り人も居らず、駅前通りや自分が住んでいた所や通学路など、微妙に変わっていた。郊外まで足を伸ばしたら麦畑があり、子供の頃を懐かしんで麦笛を作り吹いてみたが、それに応える友の麦笛は聞こえてこなかった。

短夜や遠き貨車の音続きをり

田中弘子

夜が更けると辺りが一層静かになり、床に就くと自分の心音までもが聞こえるような気がしてくる。特に救急車のサイレンの音と鉄路を走る貨物列車の音はかなり遠くまで届く。貨物基地から別の基地まで長い編成のコンテナ列車が走って行く。何となくその音を聞きながら夢路をたどる作者である。

春昼や身じろぎもせぬ亀の首

寺町知子

甲羅干しをしている亀を観察していると乱れている心が収まるような気がする。ましてや、甲羅から首を出し、ぐうつ

と伸ばした姿に出会ふと其処に釘付けになってしまう。何のためにそうしているのか、答が欲しい。作者も今すっかり亀の虜になっているのであろう。

黒穂抜く親の仇の如くぬく

飯田忠男

黒穂病に罹って黒くなった麦の穂である。放置しておくといくら伝染して被害甚大となる。怨み骨髓に徹する思いで黒穂を引き抜く農夫の心理状態が見事に表現されている。

病窓の樹々の煌めき聖五月

綿引まりこ

入院されてからもきちんと水明集の投句をされた作者に、先ず敬意を表したい。手術が無事成功し、徐々に快復されているようなので、句会に復帰されるのを鶴首している。

さて、病院での五句はなかなか佳く詠まれているが、特に客観写生のこの句に惹かれた。作者の迷いのない強い精神力を感じた。

紫陽花や足湯から見るかな女の碑

元田亮一

作者が五月に、栃木県の塩原で開催されたマラソン大会に参加し、終了後に塩原温泉の足湯で疲労した脚を癒していたら、目の前に長谷川かな女の句碑があり、その偶然性に驚い

たという話を聞いて筆者も驚いた。この句碑についての詳細は現在調査中である。

緑さす巨樹の天蓋 鬼子母神 阿部幸代

東京都豊島区雑司ヶ谷の鬼子母神堂の境内の情景であろう。鬼子母神にまつわる話とはがらつと違う初夏の気持良い若葉のそよぎが伝わってくる。「天蓋」という言葉の幹旋が、句を生き生きとさせている。

夏雲や足の三里を圧し山路 丸屋詠子

「膝頭の下で外側の少し窪んだところ」が足の三里である。山路にさしかかり、頑張ってくれよとばかり三里を圧している。どのくらい効果があるのか経験が無いので分からないが、自己暗示によって元氣が出るのだろう。

五月雨や猛き二本の御神木 石関六弦

旧暦五月の長雨を意味し、梅雨時の雨と同義で田植時に大事な雨である。樹齡が千年にもなるような幹の太い御神木に降り注ぐ雨であるから、格調のある五月雨が効果をなしていると思う。

ひるがへり住処を捜すつばくらめ 本橋稀香

燕は毎年同じ巣に戻ってくると言うから、住処を捜す行動

が解せないが、一年の間に永年使っていた巣に大きな変化が発生したのだろうか。

絶え間なく鳥呼ぶ雨後の新樹かな 遠藤人美

降り続いた雨が止み、陽が射してきた。雨に洗われた新樹が、瑞瑞しく息づいている。その時を待っていたかのように、あちこちから色々な鳥が飛来して愉しげに鳴いている。まるで、外で遊べるのを待っていた幼稚園児の様である。

島旅の宿の一献鮑刺 石黒由美子

何処の島なのであろうか。まことに羨ましい旅である。獲れたばかりの活き鮑の刺身となれば、都会で食するとなると眼が飛び出るほど金が掛かるだろうが、離島の宿であれば驚くほど安価だと思う。味は上々、気分は最高。

蝶の舞ふ川原で憩ふ老夫婦 畑宮栄子

川原を散歩している仲の良い老夫婦の後を歩いている作者であろうか。歩き疲れたのか、老夫婦が休憩している。二人を癒すかのごとく蝶が舞っている。実に快い光景である。

水 琴 窟

(水明集六月号鑑賞)

池田雅夫

表札に名前書き足す梅日和

石関六弦

元来、「梅」は一般の家の庭や農家の庭などに植えられ、その実を梅干しにしたものだ。梅干しは保存食として広く利用されてきた。「表札に名前書き足す」のは、嫁を迎えることか、あるいは子が誕生したものか。いずれもめでたいことである。「梅日和」が一家の幸福、安泰を示している。

野を焼けば忽ち風の生まれくる

山崎郁子

穏やかな早春の一日。郊外での「野を焼く」風景は春の風物詩となっている。野焼きの火の勢いで上昇気流が生じた。「忽ち風の生まれくる」にその臨場感があふれている。渦を巻き煙とともに舞い上がる熱気が風となって大空を衝き上げる。現在進行形であることが読者をその場へ誘っている。

鶯や深谷シネマの赤煉瓦

阿部貞代

「深谷シネマ」は、旧七つ梅酒造の酒蔵を改装した全国で唯一の「酒蔵映画館」である。深谷といえは「赤煉瓦」というように、今も残る「レンガ煙突」はシンボルとされている。朗朗と歌う「鶯」の声。もしや酒のせいかも知れない。

楼蘭の鵬羽搏ける黄沙かな

前田夏野

「楼蘭」は今の天山南路、ロプノールの湖畔にあった古都で、東西の交通の要所であった。中国北部の黄土地帯で大量に舞い上がる砂塵、いわゆる「黄沙」である。「鵬」は想像上の鳥で「オオトリ」とも云われる。大きな鵬の羽搏きで黄沙が舞い上がったと詠んでいる。スケールの大きな句。

雪を踏み厚き戸開くる無言館

森下美智枝

「無言館」は日中戦争、太平洋戦争の犠牲になった「戦没画学生美術館」で、一九九七（平成九）年に窪島誠一郎氏が長野県上田市に設立したもの。百三十名の画学生の作品が集蔵、展示されている。「雪を踏み厚き戸開くる」には、画学生への戦争に対する怒りや無念さを解放する思いがこもる。

霾来たる蒙古の悍馬蹴りし風

横山礼子

中国北部や蒙古の黄土が風で舞い上がった大量の砂塵が海を越え日本上空にまで飛来し、空を黄色くし降ってくる。それを「霾（ばい・つちふる）」と呼んでいる。その霾は「蒙古の悍馬」の「蹴りし風」がもたらしたものと言っている。

切り過ぎし前髪似合ふ春の服

新井のり子

「春の服」は春の衣服のことで、新春の「春着」とは別である。冬の寒さも峠を越して暖かな日がつづく。そこで、長くのびていた髪を思いきって切ったのだ。「切り過ぎし前髪」であるが「春の服」に「似合ふ」のでお気に入りである。

強東風や農具手入れの老の黙

岡本和男

「東風」は春先に東から吹く風で、やや寒い感じがある。はげしい「強東風」の日に家にこもって「農具の手入れ」をしている老農夫。長年の経験で、こんな日は家での作業に限ると、ただ黙々と働く姿に農事の算段が秘められている。

わだかまり解けゆく文や春の雨

宍戸洋子

暖かさをもたらし、土を潤し草木を育てる「春の雨」。何かの因果でわだかまる二人。それを何とか解きたいと手紙を書いたのである。手紙を書くことで気が解れ、読んだ相手も真意を察し「わだかまり解けゆく」で丸く納まったのだ。

木の芽晴みどり児 一步また一步

菅原靖子

春の木々は日に日に芽を吹き色を増す。「木の芽晴」の暖かな日、ようやく歩き始めた「みどり児」が「一步また一步」と足どり確かに歩んでいる。その姿が木の芽と重なるのだ。

教壇に一輪挿して卒業す

北山建治郎

シャイな男子生徒であろうか。「仰げば尊し」の歌もうたわず、「有難うございました」の言葉も出ない。しかし、胸の熱いものをどうにかしたい。「教壇に一輪挿して」花を贈ったのだ。その感謝の気持ちに充分に伝わったことだろう。

早咲きの桜 一枝母送る

三森恵子

「送る」には「葬送」の意味がある。であるから母の葬儀を「母送る」で表している。その柩の中に「早咲きの桜一枝」を入れたのだ。母への感謝と愛情がひしひしと伝わってくる。安らかな眠りにつかれたことは言うまでもない。

春塵やごつた返し の陶器市

糸井しるく

先日、上野恩賜公園で「大陶器市」が開催された。他にも各地で陶器市が行われている。会場は主に大きな公園で、「ごつた返し」の広場には「春塵」が舞い上がっている。強風に加え、人混みの足元からも土埃がたち上がっている。

春告鳥 第二声待ち耳澄ます

高山みどり

「春告鳥」は鶯のこと。「ホーホケキョ」となく。「春告鳥の第二声を待ちて耳澄ます」と、助詞を加えると散文になってしまう。「耳澄ませ春告鳥の第二声」と語順を変えたい。

大村節代 選

鼓笛集

筍や世に出る前に引き抜かれ

鍋搜す丸ごと茹づる真竹の子

釜炊きの筍飯の具沢山

田草取地味で目立たぬ嫁仕事

梅干が真中にありて手弁当

初夏の検診終へれば戻る酒の量

落人の村の賑はひ蕎麦の花

巡らせば高嶺の近し蕎麦の花

蕎麦の花一陣の風涉りけり

栗の花はらはらはらと梅雨を呼ぶ

墜栗花雨やつて来ぬ間の大洗濯

庭隅のひよろり健気な七変化

皆川更穂

川島夕峰

秋谷風舎

飯田忠男

満月の夜の明るさ蜘蛛の糸

美しく太りて濁り鮒走る

晴天へ児童合唱ウエストン祭

息上がる胸突坂に青葉風

桜トラム沿線の薔薇咲き乱れ

松蟬の声透き通り山包む

箱根路をいよよ深まる青葉かな

足下の夏川歪む吊りの橋

人知れず咲く石楠花へ案内人

眠る人本読む人も初夏のバス

まだ枯れぬ一輪挿しの薔薇の枝

取れたての大葉かがやく和風スパ

ペダル漕ぐ照る照る坊主走り梅雨

蝶むつび舞ひ昇りゆく梅雨の空

額紫陽花は廻るを止めむ恋の果

小林京子

菅原真理

岡田宣子

元田亮一

杉浦千祐

貴婦人と風雅を競ふ花菖蒲
純白の紫陽花映ゆる雨の庭
薫風や丹精込めし花時計

ベッコウ飴型をととのへ夏祭
夏嵐風神雷神どよめきて
滝壺にすつくと立てり修業僧

別荘地の庭の青苔すがすがし
父の日に娘手料理腕上がる
吟行日和に都電全線夏初め

五月雨や入江に沿ふてお茶の市
さみだるる空き家の庭の眠りかな
時の日や「面」の鮮やかなる打突

橋の碑を辿れば堀切菖蒲園
花菖蒲高速道のジャンクション
紫陽花や駄菓子はガラス瓶の中

走り梅雨傘もささずに尻端折り
火垂る舞ふアラブの墓の悲しさよ
紫陽花や雨のひとひら色となる

反町 修

山下ユリ子

森下美智枝

遠藤人美

樋口元美

持永喜夫

読書する夢中となりし短夜かな
珍しき紫陽花に引かれ訪問す
夏の昼歩く歩くや古寺巡り

煙突の煙一筋春の雲
八十路の吾未知の世界や薪能
花園をさまよひをれば梅雨の雷

芍薬や白キジ猫の脇役に
ぶるるんと揺るるゼリーや母の味
野外演奏天使の歌声響きけり

蚊遣り火の背戸より漏るる煙の香
墓石に生臭き蛇朝の雨
大蜘蛛のさわさわ走る莫塵の上

鼓笛集作品評

大村 節代

筍や世に出る前に引き抜かれ

皆川 更穂

筍で纏めた三句。特に一句目の中七が面白い。筍とは竹の地下から出る若芽である。筍を握る時は、その芽が地上に出るか出ないかの時に掘らないと、あの柔らかな食感は得られない。その微妙な感覚を、世に出る前にの表現に思わず、同感した。

南條さわゑ

武田 重子

小駒さち子

倉田 星歩

初夏の検診終えれば戻る酒の量

川島夕峰

誰にでも思いあたる情景を、真に素直に句にされている。定期検診でも、臨時の検診でも、とにかく検診の前は、誰しも、早寝、早起き、酒は控えてと思う。そして結果がよければ、酒量もそぞろ元に戻ってしまうのは人間の性なのだろうか。

落人の村の賑はひ蕎麦の花

秋谷風舎

中央アジア原産で日本には縄文時代に渡米したといわれる蕎麦。山一面に蕎麦の白い花が揺れると、平家の女人やら落人やらが、一斉蜂起したかのように、いつもはしんとしている村も美ましく見える。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）

本橋稀香

早熟で未熟な少女青瓢

多くの人で、ごったがえしている東京駅の八重洲口に向かっていると、露出度の高い身なりで一際目立つ女の子達に目が止まりました。抜群のスタイルでいわゆる臍出しルックの彼女達を眺めていると不意に「早熟で未熟な少女」という上五中七がひらめきました。兼題の青瓢に手こずっていた事も解消した瞬間でもありました。

特集 山岳俳句の詩情

特集 鈴木真砂女の世界

巻頭作品10句

矢島渚男・二ノ宮一雄・戸恒東人
花谷 清・西村和子・藤田直子
和田華凜・堀本裕樹

俳壇

9月号

8月14日発売
定価1000円（税込）

巻頭エッセイ
西嶋あさ子

八木健道 滑稽俳壇

四季巡詠33句【第Ⅳ期】……和田順子・長嶺千晶

季節の移ろい……二十四節気……松岡隆子
俳人の住む町……吉田千嘉子・谷口智行
編集室の風景……かつらぎ俳句会
俳諧文法への招待……仁平 勝
二度目の俳句入門……長谷川 權
知つてるようで知らない俳句用語……井上泰至
今月の句……………火星俳句会

俳句と随想12か月 安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

俳誌望見

梅澤輝翠

「笏」

令和七年五月号

通卷三八五号

主宰

山本一步

発行所

東京都町田市

平成五年五月 横浜にて創刊 師系 小林康治 「切れと調べに重きを置いた伝統俳句を目指す」を理念とする。月刊

主宰句「牡丹」十二句より

鳴く鳥の愛鳥週間など知らず

鳥類保護の週間。空飛ぶ鳥達には何も解っていないのであるうか。人間が作った行事である由、しかし鳥にとっても人間界にとっても大切な一週間である事は間違いないのです。

粽解くほどの面倒なら許す

面倒な話、面倒な仕事、世の中には面倒な事は考え様によつては沢山あります。そうねえと聞きながら粽の蘭草を解く位の事なら聞いていてもよし、やつてもよしと云い切る人、なかなかゆつたりしてて好いですよ。そんな生活。

毛虫進めり太りては細りては

嫌われ者か？ その言う様子、前に出た時は伸び切つて細り又縮んで太つては進むの繰返しでも一生懸命生きています。

一人がよし螢に会ひにゆくならば

親子連れ二人連れ、でもある時は一人が好しなんですよね、しみじみと気兼ね無く螢と話したい時があります。

どの句も主宰が云われている様に「見えるように」すべてが目の前に見えておりました。

秀嶺集 八名各七句より

水底は淋しきところ 田螺鳴く

大関

洋

裏の田へ行くだけの橋蜘蛛生まる 高尾峯人

山嶺集 四名各七句より

卓に置く影が支への寒卵 中本憲己

蜷舟搔き籠上ぐるたび傾ぎ

星野輝子

山間集 主宰選 十二名 各七句より

風揚げて風の重さの糸を引く 大関 司

空遠くなる菜の花の絨毯に

家田あつ子

笏集 主宰選 二十九名より

しやばん玉を風から守るやうに立つ 山本一葉

飯蛸の魚籠を放さぬ力かな

浮田雁人

令和七年 第24回笏賞星野輝子 第11回青韻賞山本一葉

二人とも句会はほとんど皆勤です。俳句を数多く作り、句会で採まれたことが今回の受賞に繋がったのでしよう。

今後のお二人のいよいよの活躍を期待します、とコメント。

やまびこ雑記 山本一步「見えるように」より

俳句は平明な言葉で、見えるように、美しくなければならぬ。「平明な言葉で」は難しい言葉を排除すればよい。一番難しいのは見えるようにではないかと、例として山と花について述べられ、中略、風景を伝える為に言葉を尽くすと俳句が窮屈になり、余裕がない。俳句は読者が疑似体験できることが大切、それに共感すれば読者にとっても良い句、共感できなければ作者か読者が未熟であるでしよう、と言っても万人が共感する句などほとんどありませんから。読む側の体験によつて見えてくる風景が違ってくる事も事実、ではどう作れば見えるような句になるか、決して背伸びせず欲ばらず、言いたい事を一点に集中し、目の前の風景、過去に体験した場所、その中で心動かしたもののそれだけを表現すればよい。要は中心が見えるように、ということなのです。

句作の上で最な事を改めて学ばさせて頂きました。

網野月を選

山紫集

風薫る背だけの違ふマグカップ

石関六弦

風薫る鐘撞堂の黒柱

河野はるみ

風薫るドイツ育ちの十六歳

山戸美子

風の香や日に背を向けて憩ふ人

曲淵徹雄

水のほか急ぐものなし風薫る

森 和子

蜜月をしのぶ旅路や風薫る

近藤徹平

この道はタイム・トンネル風薫る

内田恵子

薫風と遊んでをりぬ髻髪

笹本啓子

捨てたもの諦めたもの風薫る

山中いちい

風薫る訪問介護のペダル踏む

北山建治郎

薫風をポケットに入れ見舞客

綿引まりこ

浅瀬にも風薫り立つ船のへり

青木鶴城

薫風や浜を占むる貝の殻

秋谷風舍

風薫る竹林に消ゆ緋毛氈

新 暦文

風薫る水番屋あと芭蕉庵

阿部幸代

呪ひのちちんぷいぷい風薫る

荒井俱子

学僧の上目遣ひや風薫る

新井のり子

——以上特選

街路樹の力強さよ風薫る

飯田忠男

風薫る湯上がりの髪日和下駄

川島夕峰

キッチンで濃茶一服風薫る

池田珪子

風薫る喉を競ふ鳥たちよ

熊倉千重子

疾走の人馬一体風薫る

池田雅夫

薫風やレースの艇の橋下抜け

倉田星歩

薫風や茅葺き屋根のジェラート店

石田慶子

風薫るベンチの読書続けをり

小駒さち子

薫風を喜ぶ下ろしたてのシャツ

石川理恵

輪唱の窓の明るさ風薫る

小林京子

風薫る育ち盛りの吾子きらら

糸井しるく

風薫る急拵への同窓会

小山あつ子

風薫る富士の樹海を颯爽と

井上玲子

風薫るライダーの群遠くより

榊原聰子

魚河岸を閉める店主に風薫る

梅澤輝翠

風薫る気兼ねいらざる親子酒

佐々木史女

すらすらと音読の子や風薫る

梅澤佐江

寿と書く日の多く風薫る

篠崎紀子

改札のタッチ決済風薫る

遠藤人美

複線やダイヤ間合ひに風薫る

篠原さよ子

風薫る天文台の名は「きらら」

大場順子

ときめきは君の所為だよ風薫る

渋谷さいち

薫風や稚の欠伸に微笑みて

岡田宣子

風薫ることさら旨し塩にぎり

嶋田洋子

薫風やかな女の句碑にご挨拶

清水桂子

薫風や黒潮蛇行治まりぬ

高橋満耶子

境内へ薫風すがし樟大樹

下川光子

付き添うて長き参道風薫る

武田重子

風薫る函館本線北へ北へ

霜多光代

湯浴みして女性仄かや風薫る

田中章嘉

薫風にのせて親子の駄ピアノ

菅原卓郎

薫風の攫ひ残せし鬱ひとつ

寺内洋子

同窓会に彼の人の声風薫る

菅原真理

薫風や都電の揺れを未知の町

寺町知子

風薫る前沢牛の祭あと

杉浦千祐

隠しごとみんな吐き出し風薫る

飛永 鼓

風薫る樺広場に大道芸

鈴木藻好

風薫る親子で巡る美術館

南條さわゑ

風薫る伊勢路辿りて格子窓

鈴木玲子

ボート部の子等逸る朝練風薫る

西幅公子

風薫る江ノ島鳶が飯狙ひ

関谷多美子

開校のフリースクール風薫る

野口和子

ジープの膝の大穴風薫る

瀬戸雄二郎

風薫る稜線くつきり信濃町

野村美子

薫風や肩組み歌ふ応援歌

染谷風子

風薫る美意識高き孫なれど

畑宮栄子

トロットのブローニユの森風薫る

反町 修

狒犬の阿の口抜ける薫る風

原田自然

棟上げの木遣朗朗風薫る

原田 秀子

風薫る水郡線の貨車の音

元田 亮一

風薫る撫で牛の膝びつかぴか

樋口 元美

半部をあげて薫風招き入る

本橋 稀香

荆妻はいつも控へ目風薫る

日高道を

初産の乳を搾りて風薫る

森下 山菜

風薫る上り列車を待つホーム

檜鼻ことは

相模湖に架かる大橋風薫る

森下 美智枝

バレエ教室の少女の足や風薫る

福田 千春

教会のオルガン流れ風薫る

山岸 久美子

クラーク像北の大地の風薫る

保坂 翔太

風香るそばのれん立つ峠道

山下 ユリ子

風薫る江田島知覧広島に

正木 萬蝶

薫風に髪遊ばせてアリアなど

湯浅 和

四阿に座し鯉が相手や風薫る

松宮 保人

林道をギアをトップに風薫る

横山 君夫

園丁の手際鮮やか風薫る

丸屋 詠子

惑星に住む幸せや風薫る

横山 礼子

句も和歌も素数仕立てよ風薫る

丸山 マスミ

風薫る石段高き久能山

吉川 拓真

薫風や木洩れ日辿る下駄と杖

皆川 更穂

嬉嬉として鳥のおしやべり風薫る

宮崎 チアキ

山紫集作品評

網野月を

風薫る背だけの違ふマグカップ

石関六弦

座五の「マグカップ」が日常を映し出して秀逸である。句中のアイテムの選択は句のシチュエーションや軽み、もしくは重みを演出してくれる。中七の「背だけの違ふ」から複数の存在が確認できるのだが、二つなら兄弟か夫婦か、もっと多ければ家族か仲間同士か、いろいろに解釈が広がって楽しい。

上五の季語「風薫る」が句全体を明るいいメージに確定しているのであって、季語の活躍が効果大である。

風薫る 鐘撞堂の黒柱

河野はるみ

「風薫る」初夏の季の中で、四足の「鐘撞堂の黒柱」だけが泰然自若として無言を通して。四季、春夏秋冬を通じて確りと立ち続ける「鐘撞堂の黒柱」は年中の四つの季を見守る守り神のようである。その「黒柱」を作者は、初夏の「風薫る」季節に配合している。春秋の安寧でもなく、冬の峻烈でもなく、何方かと言うと「黒柱」自身が季節の煌びやかさ

に引けを取るほどの明るさの中に「黒柱」を立たせている。古武士のような「黒柱」を筆者は想起した。

風薫るドイツ育ちの十六歳

山戸美子

ドイツの五月は絶品である。「ゴールドネ（黄金の）」と形容される十月と並んで、愛されている月である。万物全ての息吹が高揚する季節なのである。そしてその地から来訪した十六歳は、将に息吹高揚する年頃であろう。眩しいばかりである。「風薫る」季節と「十六歳」は同じベクトルを示している。同価値の配合の成功例であろう。

風の香や日に背を向けて憩ふ人

曲淵徹雄

「日に背を向けて」が肝である。「日に」対して何か屈託があるのかも知れず、また偶然の位置関係なのかも知れないが、少なくとも作者は「日に背を向けて」に重きを置いているのであって、「憩ふ人」の意思に関わらず作者は、「日に背を向けて」に意味を見出しているのである。

「日に」対して何か屈託があるのであれば、それは日の匂いを避けて「風の香」だけを楽しまたいという人を描いているようにも読み取ることが出来る。そこまで解析して、筆者は留まってしまった。この句は詩なのである。解析することだけが句を鑑賞する術ではないようである。

水のほか急ぐものなし風薫る

森 和子

「水」は水そのものであり、「水」に象徴させた何かでもあ

るだろう。詩人は時として哲学者である。水をテーマにした詩は、哲学的側面を持つようである。また水をテーマにすることで、ある種の箴言を生み出すようなことにもなる様である。

掲句は実景の中から、例えばせせらぎなどの水の流れを「水」と象徴させたものであろうと想像するが、象徴させたことに拠って万物の形態が叙景できたように思われる。この作句法は際どい叙景であって、生半可に真似するべきものではない様に思われる。

蜜月をしのぶ旅路や風薫る

近藤徹平

中七の「しのぶ」は、思い出を想起しながら、また思い出を辿りながら、と解釈させて頂きました。嘗てのハネムーンと同じ「旅路」をご夫婦で旅しながら、その際の薫風を想起している様は、幸せの極であり、読者は奥深い人生の歩みを感得する。羨ましい限りである。

中七の「：や」の切れ字の何とも重みのあることか。転換としての切れ字であるとともに、感嘆の「：や」でもある。作者ご本人の面差しを思い浮かべながら鑑賞している。

この道はタイム・トンネル風薫る

内田恵子

川端康成の『雪国』を惹起させている。『雪国』で表現するところのトンネルは気象的な隔離を表現して、描こうとしている小説世界の場面設定を行っているのだが、掲句はタイム・トンネルの先に控えていた初夏との遭遇を場面づけてい

る。上五の「この道」は実景の中での事柄であろうが、深読みして解することも出来る。

薫風と遊んでをりぬ髻髪

笹本啓子

座五の「髻髪」は「うなぬかみ」よ訓ずれば良いのであろうか。「髻」とは幼子の項の通りまで垂らした髪のことであり、その髪の柔らかみのある繊細さと、幼児の持つ生への無限性が、句の生き生きとした世界観を演出している。「髻髪」の幼子と「薫風」がピッタリと合致している。

捨てたものの諦めたもの風薫る

山中いちい

具象は僅かに座五の季語「風薫る」である。季語である「風薫る」の具象性と言っても、多分に抒情的な要素を含んでいて、季語「風薫る」を使用する時には、作者の思い入れが句に滲み出すようである。

掲句は事俳句の典型のような句作であるが、作者が思描く句中の景と季語の関係性の確かさと、上五中七の多くの人からの共感を呼ぶ句意が句を成功に導いている。

風薫る訪問介護のペダル踏み

北山建治郎

作者が「訪問介護のペダル踏み」の景を目撃したのであらう。句意の意外性もさることながら、自転車勢の勢いが活写されている。上五の季語「風薫る」が景の前向きな指向性を担保しているからである。

句集喝采

菅原卓郎

◆伊藤政美「雪の花束」

菜の花叢書

著者略歴 昭和十五年三重県四日市市生れ。昭和三十六年山口県に師事。昭和三十八年山口県を主宰「菜の花」創刊に参画。編集長、同人会長、副主席を経て平成十五年より主宰就任。現代俳句協会、東海現代俳句協会及び三重県俳句協会各顧問。

著者九冊目の句集。市井の一齣ずつを大切にし、それを俳句の楽しさと捉えている。「あと十年」を口癖に後進の育成に励み、今は十分に託せる様に迄なつたとの事。

雪嶺のことに白きを主峰とす

参道の真ん中寒し初詣

女正月持ち歌が増えてをり

霜柱世界遺産のやうに立ち

寒戻るパンタグラフの火花散り

第二句、神社の参道の中央は神様がお通りになるのであまり歩く人は少ない。初詣の混雑の中で妙に空白が有る。そこに寒さを見出した。確かに頷ける。第四句、どこの世界遺産なのだろうか。ドーリア式のパルテノン神殿であろうか。霜柱にエンタシスの円柱を思い起こされる。

部屋中に古書の句ひや春の雨

老いてゆく何もなき日は草を引き

団扇貰ひたちまち祭びととなる

白靴の汚るるやうに老いてゆく

第三句、正にお祭りの光景。深見けん二の「白粉を鼻に忽ち祭の子」の句の様にお祭りはアイテムひとつで輪に溶け込むことが出来る。日本の古き良き風習である。

◆若槻妙子「花のころ」

ウエップ

著者略歴 昭和九年徳島県生れ。平成十一年「朝」入会、岡本眸に師事。平成二十八年「朝」終刊。平成二十九年「菜」入会、松岡隆子に師事。俳人協会会員。

俳句を始める原点は高校一年生で出合った万葉集と大学での英詩にあるとの事。短歌からスタートし徐々に俳句に転向していった。英詩の音律の美しさに惹かれつつ句作に励む。

山峡の稲架高だかと夕鴉

霜晴やきりりと締むる琴の糸

夏雲や真一文字に防波堤

冬ざれや鉄路の石のみな尖り

新しき箒の句ふ十二月

第三句、防波堤には夏の雲が良く似合う。磯の香りが漂い太陽に熱せられ沖に向かつて真一文字に突き出す防波堤。真夏の原風景だ。第五句、箒と箒の句いは今でも脳裏にこびりついている。師走の箒なれば猶更である。

春昼や投網繕ふ鼻眼鏡

名月となるべく月の勢ひくる

ベクレルの仔細は知らず薯植うる

パン屋の戸押せば鈴鳴る巴里祭

鯉跳ねし音万緑に吸ひ込まる

第三句、東日本大震災の被害は未だ癒えてはいない。放射線量など構っちゃ居られない。ただ黙々と薩摩芋の苗蔓を定植していく。憤懣やるかたない。第四句、洒落たベーカーリー。通りはパリ祭の真っ最中で皆楽しんでる。メルシー。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

帆船の揺らぐ航跡夏の雲
蛇苺単線で行く母の里
衣川古戦場跡青時雨
老鷲や史跡ガイドの赤備
蛇苺見向きもされぬ慰霊の碑
巡礼の絶えぬ足跡浜の朱夏
天泣に濡るるも一興蛇苺
懐郷の口火となりぬ蛇苺

喜恵 節代 順子 稀香 亮一 卓郎 マスミ 由紀子
以上特選
はるみ 亮一 卓郎 由紀子
徹平 和葉

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

早苗田や農の跡取り育ちをり
走り梅雨遺跡を覆ふ青シート
海賊の城跡寡黙雲の峰
最終便の光跡見つむ白夜かな
天折の画家の筆跡額の花
短夜や痕跡無くて去るは誰
蛇苺小さくなりし母の膝
なつていますと藪にひそかに蛇苺
道少し逸れて真つ赤な蛇苺

チアキ 稀香 マスミ 京子 延昭 節代 喜恵 順子 和子

わた館をもて余してる祭の子
夢なればまた逢へるかも明易し
垣破れて零れしままの実梅かな
軒先にヒラリ半纏祭りあと
雑草を抜き残しまま梅雨に入る
小さき手に百円玉や祭りの夜
蛸壺を束ね早寝の漁師宿
宵宮や再会の友妻を連れ
星の海思惑ありて草魚泳ぐ

千春 竺仙 恵美子 敏江 亜弥子 みどり 慶子 いちい 以上特選
士史 峰雄 恵美子 千春 亜弥子 敏江 竺仙 慶子



三社から神田鳥越夏來たる
潮騒の宿水蛸の薄造り
木遣り唄祭を告ぐる纏かな

いちい
みどり
鶴城

第三例会（東京）

五明 昇報
曲淵 徹雄

青鳶のぞく子の部屋占むる世界地図
観世音の御目の中の著我の花
簞は寺の抜け道著我の花

順子

菩提寺の裏山著我の花明かり

康世

著我咲いて名馬ひつそり世を去りぬ

萬蝶

夏霞大吊橋を天の座に

昇

鮑膳御食つ国なる若狭の夜

〃

——以上特選——

取り壊す土台の側に著我の花
花著我の群れ何人も寄せ付けず
姫著我や舞妓は昼の貌をして
箱根路の日の斑の昏き著我の花
離れ家へ募る想ひや著我の花
ステッキをくると回し夏帽子
思惟いまだ著我の花咲く中に佇ち
著我の花手摺を頼み登る磴
著我の花敵味方なき武將塚

星歩
理恵
萬蝶
順子
千祐
雅夫
康世
徹雄
昇

第四例会（浦和）

石井 喜恵報
反町 修報

第五例会（浦和）

梅澤 佐江報
河野はるみ

蕎麦殻のまくら里帰りの昼寝
梅雨寒や柳行李の底に破れ
大仏の背中を流す男梅雨
梅雨深しサドルうつすら糸状菌
渡し舟に客来るまでの三尺寝
旅帰リシエスタ気取る長昼寝
見目美しき傘の会釈や梅雨の坂

由紀子
〃
翔太
行雄
マスミ
昇
喜恵

——以上特選——

アイドリングシート傾け三尺寝
手枕の母まるくなり三尺寝
青梅雨やわたし独りの美術館
昼飯のあとの極楽三尺寝
梅雨入りや宅配便の不在票
長昼寝して虫の居所変へにけり
梅雨寒に合羽着て立つ地蔵かな
現世に引き戻されし昼寝覚
大昼寝宇宙の涯まで旅をせり
小坊主の寝言のお経昼寝かな
柔らかな髪そよがせて児の昼寝
梅雨最中シュートを決むる水しぶき

修
光子
マスミ
延昭
曆文
昇
行雄
玲子
恵子
翔太
由紀子
喜恵

笹舟二つ即かず離れず夏の川
籐椅子や母の形に艶残る
人肌のぬくもりありて籐寝椅子
身をゆだね来し方偲ぶ籐寝椅子
夏の川六歩で渡る丸木橋
激流の小橋吞まむと夏の川
この家の長きを語る籐の椅子
籐椅子にシヨパンとワイン更けゆく夜

千祐
〃
はるみ
玲子
義子
夏野
紀子
佐江

——以上特選——

星空を波に浮かせて夏の川
願ひごと一つ流るる夏の川
古籐椅子湖眺めある大使邸
足裏の小石流るる夏の川
水切りを競ふ少年夏の川
籐椅子や湯宿二階の長廊下
籐寝椅子名の星探す山の宿
縁側に青き風受け籐寝椅子
山峡の瀬音清しき夏の川

正木 萬蝶報
石田 慶子

黒塀や蜘蛛の囲揺らす三昧の音
蜘蛛の囲の美しき迷宮雨後の庭
月光に山の明るさ蜘蛛の糸
糸放つ蜘蛛一瞬の無言劇
結界は女郎蜘蛛の囲奥の院

慶子
佐江
京子
稀香
マスミ

嫁姑息子中立心太

夏の日や洛中洛外図に見入る

蜘蛛の囀の監視カメラに光る夜

蜘蛛の糸慈悲の心を絡めをり

蜘蛛の巣をウワツと被るさうぢかな

中庭に蔓薔薇植ゑぬ呪詛のごと

蜘蛛の囀の鉢植ゑの園占領す

蜘蛛の囀を許す関口芭蕉庵

この家の栄枯盛衰蜘蛛の網

サーファーの背中に迫る夏怒涛

蜘蛛の囀を傘ですくふや湯葉のごと

蜘蛛の囀にかかるとれし里帰り

昨夜の雨飾り蜘蛛の囀木木の間

蜘蛛の囀の幾何学模様射る獲物

農相が火中の栗を青嵐

青すだれ空也最中をおちよぼ口

関西例会（大阪）

森本早苗報

ムンクが叫ぶ青鳥に窓ふさがれて

晩鐘の余韻翳々大植田

方言に古里見ゆる夏の宵

短夜や歎異抄など読むべきか

五月雨や地面におりし鬼瓦

短夜や明日は締切りあと一句

あぢさゐの丘また丘の先に丘

青葉光巽櫓を押し上ぐる

千 春

詠 子

萬 蝶

——以上特選——

鶴 城

星 歩

ひろこ

はるみ

マシミ

稀 香

京 子

千 春

詠 子

千 祐

慶 子

佐 江

萬 蝶

声高に漁夫ら路地ゆき明易し

短夜や添寝の赤子氣にかかり

二十人それぞれ生ける七変化

竹植ゑて腕組む男高笑ひ

短夜のより短かりクラス会

緑蔭や池の水まで濃く見ゆる

短夜や伝説残しミスター逝く

短夜かな蓮ひらく音聴さしよな

夕風のほんの余りを受く蚯蚓

峠道山百合の香のほんのりと

古古古に長蛇の列や額の花

短夜や夢の彼の人颯と消ゆ

和 子

道 子

千 世

千 枝

洋 子

きわゑ

ノルン

洋 子

人 美

千 津

満 耶

早 苗

昔話あれこれ 49

師輔 紀貫之に代詠を頼んだ事

大変微笑ましい話であるが、師輔が貫

之の家を直々に訪れたことがあった。

それは、次のような次第である。

師輔が大納言であつた時、正月一日に

着用すべき魚袋が壊れ修理に出したので、

取り敢えず父君貞信公（忠平）のお屋敷に

参上して、事情を話し内裏に遅参の由を

申し上げたところ、忠平公は、長年お持

ちになつてゐた魚袋を取り出されて

「あやかりものにもでないさ」

と言つて差し上げられた。それは正

式に松の枝に付けてあつた。

*魚袋（ぎょふく）たい・晴れの日の装束の

石帯に繫け、右腰に下げる飾り。

白鯨の皮で包んだ長方形の箱に幾

つかの魚形の模様を付けた

師輔は恐悦の気持ちを表すために自

分で和歌が詠めないわけではないが、

「日本一の歌詠みの貫之に詠んでもら

おう」

と貫之の家にわざわざ出向いたので

ある。

代詠を頼まれた貫之の面目は如何ば

かりであつたことだろう。

その代詠は

吹く風に氷融けたる池の魚

千代まで松の蔭に隠れむ

（大意）そよ吹く春風に冬の氷が解け

た池の魚（わたくし師輔）は、千年

の後までも、めでたい松（お父様）

のお陰を蒙つてその庇護の下に栄

えること（ございましょう）。

（つづく）

各地句会



りんどう俳句会 (浦和)

定年や今日はいづこへアロハシャツ
植田千枚水の匂ひの出羽の国
さ緑の海となりたる植田かな
定休日無しの店番誘蛾灯
花蜜柑従姉の声の浮かびくる
漣の植田に映るオスプレイ
薫りあふるる潮待ち浦の花蜜柑

柿の木塾 (浦和)

十葉の香り秘密の箱を開け
憂ひなく青水無月の風に棲む
十葉干して島の小さな診療所
水無月や教会に舞ふ紙吹雪
水無月の空に黒雲地に帷
十葉に負けたる老いの花壇かな
十葉のはびこつてある異常気象

たかん俳句会 (川口)

遠くへは行かぬ旅なり夏帽子
薫風や行きと帰りは違ふ道
薫風や白杵石仏いとけなし
薫風やポニーテールを揺らしをり
菩提寺の和尚の講話油照り
蛸 蛸 の 会 (浦和)

君 夫
順 太
翔 峰
夕 雄
徹 子
風 郎
卓 郎

少年の夏優勝旗手に凱旋す
紫陽花の彩泉水に滲みをり
それなりの幸せ雨の四葩かな
木々の声背に歩むや山滴る
切通し抜けてひと息山滴る
塩にざり一口がぶり山滴る
紫陽花の風天空へ吸はれけり
磨崖仏の眼差遠し山滴る
空あふぐ泰山木の花優し
アランドロンの声優恋し薔薇を剪る
露座仏の借景の山滴れり

俳句の手ほどき (岩槻)

恵 子
昇
かつ子
和 葉
節 代
章 嘉
和 子

父の日のリボンの花の包装紙
能装束の金欄翳る墜栗花雨
玉葱を刻む涙も拭はずに
玉葱やフレンチシェフのスープ皿

義 子
のり子
み ち
小 麦
鶴 城

包装の割に小さきメロンかな
玉葱の所為の涙か料る夫
玉葱を吊す軒下風通る
改装の蔵の茶房や古すだれ
ひとつづつ玉葱縛る土間あかり
装を凝らして咲くや夏椿
船装ふ遠流の島に梅雨の星
かきつばた和装本その軽さかな
太古より装ふ緑この大地
「荘苑」や八頭身の乙女の夏

しるく
夏 野
礼 子
さち子
ひさの
元 美
風 舍
秀 子
幸 子
月 子
宣 子

ミモザの会 (横浜)

延 昭
佐 江
義 子
徹 平

万太郎が手招きをして鬼灯市
梅雨晴間青空うつす水たまり
十葉の居座りてをりわが家に
鉄線花濃い紫は母が好き
一人居のお茶のお供に水羊羹
鬼灯市法被おやちと青空と
九十の母と叔母行く四万六千日
鎮守社の祠は凜と青葉闇
外つ国人のあまた鬼灯市の宵
古古古米古古米古米芒種の日
山 茶 花 (浦和)
薄着してブルッと一枚梅雨寒し
千梅を返す子の手のぎこちなさ

忠 男
翔 太
美 子
桂 子
幸 代
久 美
卓 郎
知 子
チアキ
かつ子

史 代
美 千子
由 美子
栄 子
亜 弥子
玲 子
慶 子
詠 子
萬 蝶
千 春

美 江子
マスマ

珊瑚の会 (浦和)

坪庭に小さき水車鰻食ぶ
鰻裂く職人芸の人無口
鰻食ぶ「う」の一字の藍暖簾
一人居の贅とときに鰻飯
顔見てより捌く鰻屋をとこ伊達
飴色の父ののこせし鰻筒
結論の是非はともかく鰻食ぶ
手練の刃捌く鰻の黒光り
木耳や峡の湯宿の五目飯
鰻好き白焼好きよ三味聞ゆ
若枝句会 (浦和)
雷声や地響き立てて走り抜く
童らがさきイカ垂らし梅雨鯨
大鯨来世は人に生まれたし
遊歩道歩幅短め七変化
紫陽花の球体奥に慈雨宿る
紫陽花の我が家のいろに染まりけり
芽吹句会 (浦和)
駿馬に鞭ゴールはそこぞ風青し
夢果てぬ宇宙への旅夏銀河
老鷺の声飴する湖畔かな
老鷺の森を響動もす谷渡り

恵子 史代 広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 昇 節代 泰子 みどり 美佐子 しょうこう 貞代 敏江 富子 久美子 玲子 修

青嵐いまも吹きゐる生家かな
青嵐勇気百倍湧き出づる
老鷺の一字の社殿土俵入り
青嵐うねり溢るる道路鏡
青嵐バンジージャンプ視界良し
皐月の会 (浦和)
麦藁帽子逃げて捕まるさび畑
大いなる影引く山の蟻の道
全線の復旧終り夏帽子
よく笑ふ長女のほつぺさくらんば
到着ロビーハグして飛ばす夏帽子
砂浜に足跡消えて夏帽子

若楠句会 (浦和)

黒南風や昼呑み誘ふもつ煮込み
雨乞ひか闇夜に鳴くは牛蛙
黒南風や鳩の目付きの慌ただし
ゆつたりと生きるがよろし牛蛙
万緑や第六感の動き出す
牛蛙水が舞台のモダンジャズ
黒南風や波止に押し寄す魚の群
暗闇を増幅するや牛蛙
叔母あての団扇レターや感謝込め
黒南風や骸終戦知らぬまま
図太さで牛蛙のごと生きてみよ

ひろこ チアキ 弘子 千重子 道を 山菜 光代 珪子 曆文 更穂 さいち 真由美 久美子 直子 京子 慶子 風舎 葉子 弘子 鶴城 宏治

水明熊谷句会 (熊谷)
緑蔭の椅子に風待つ小半時
緑蔭や玉砂利を踏む立烏帽子
緑蔭にわれ引き入るる影法師
神州を愛へし玉音八月来
爪革の汚れを拭ふ梅雨晴間
緑蔭の中は時計を見ずにある
嗚呼玉杯を飲んで見たきや夕涼み
梅雨晴をあまさず使ひ布団干す
水たまりばかり歩く子梅雨晴間
芙蓉句会 (浦和)
下町の風ぬける路地釣忍
灰汁抜けの単の着付け老妓未だ
お見合ひはこりごりと解く単帯
和歌山水明句会 (和歌山)
螢火は恋の明滅古典にも
五月雨ややうやく背広さまになり
故里の流れゆるやか鮎むれる
「今ど」こと帰宅の遅し夜のつまる
折紙のかへる飛びだす夏帽子
玄関に守宮びつたり離れない
両の掌にみ仏包み連開く
ずぶ濡れの薔薇の悲鳴を聞きもする

栄子 徹平 卓郎 風子 秀子 道を 忠男 燈女 茂子 税子 仁 美子 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 きわゑ 洋子 廸代

櫟の会 (浦和)

てんとう虫草間彌生の絵に混じる
食べ惜しみ保存の逸品微生物
手のひらを這ふてんと虫こそばゆし
星割れて急発進のてんと虫
天道虫サンバの衣装で飛び立てり
曇り空微香うつすら古書の市

野ばらの会 (浦和)

エメラルド色の青梅慈雨の朝
遮光カーテン開けて夏めく陽の光
青梅を指差し探す親子かな
夏めきて犬の掘る穴一つ増ゆ
まだ着るかはてな山積み更衣

神戸大池句会 (神戸)

楊梅に戦後は口を染めにけり
鯛最中誕生の地ぞ明石蛸

円卓の会 (浦和)

静寂なる魚籠に憩へり濁り鮎
異国語の飛び交ふ朱夏の抹茶カフェ
夕焼がいつも眉間を照らしをり
逸る気や垣間見えたる濁り鮎
天幕の白き花屋や梅雨晴間

朋子 裕誌 富子 文子 あつ子 千重子 秀子 栄子 夏江 茂子 みき子 千津子 早苗

空の繋がる天安門の忌を修す
秩父路の白装束や夏木立
美しく太りて濁り鮎をどる
甲羅干す大亀小亀梅雨の晴
濁り鮎カオスの星の未来とは

雛の会 (浦和)

缶切りの一周半夏雨の午後
行儀よく三つ指ついて雨蛙
争ひの終りが見えぬ半夏生
五月雨駅階段を脚線美
乗りし葉に青さを重ね雨蛙
箸置もガラスに変へて半夏生
農休みはづむ茶話半夏生
梅雨最中またも線状降水帯

若狭水明会 (若狭)

「朝ドラ」の大方見馴れ夏きざす
生きるとは食べることなり燕の子
風薫る女釣り師は京ナンバー
ガラス器の並ぶ卓上夏めきぬ
球児らの丸刈青し夏きざす
燕の子大口開けて齒科の椅子
夏きざす弓引く乙女の遠まなざし
夏めきて踏み入る蔵の空気かな
夏めくと書き出す通知クラス会

月を 輝翠 京子 翔太 鶴城 喜恵 桂子 はるみ チアキ 燈女 輝翠 公子 佐江 昭代 ことは 寛久 郁子 笑風 和風 友夏 祥子 鼓

夏めくや湖畔道路にボランティア
夏めくや田は満滴と水湛へ
夏めくやチャイムの曲は空駆ける
夏めくや遊覧船の滯白し
山伏に会ふ修験道夏きざす
りそな俳句会 (浦和)

螢火やオンザロックの光る指
短夜や「木曽の最後」を枕辺に
渾身の愛の告白蛍の火
衣衣の時も惜しみて短夜かな
短夜にヨット走らすデนมマーク
短夜や一番鶏の長き声
櫻蔭句会 (浦和)

栗の花丹波篠山匂ひ立つ
東京染めのTシャツを買ふ立夏かな
栗の花ここより先はけもの道
栗の花噴き出すやうな咲きつぶり
吉原地蔵の赤き口紅花魁草
青葉木菟境内浅き鬼子母神
新緑の神田川沿ひ染工房
花栗の波うつ匂ひ夕間暮
雲流れ手をふる如く栗の花
ばらの咲く路面電車や民の足
葉桜の小暗き小径染工房

自然 風湖 初花 保人 風花 建治郎 マスミ 久美子 道を 雅夫 行雄 美子 由紀子 公子 美智枝 茂子 多美子 真理 千恵 久美子 幸代

鶴川山百合句会（鶴川）

傘持つて出たかな母さん五月雨
白拍子の泪雨かも五月雨
早苗月向かう岸まで届く声
五月雨に走るよ走れランドセル
五月雨や母の形見の傘重く
どくだみの都会侵略ちやくちやくと
五月闇遠く紫ジャカランダ
シニョンの乱れ直せず五月雨
打水のかかるた館よりひよいと来る

野菊の会（与野）

はつ夏の潮の香刻む貝鉦
墓のたしかな形跡地の湿り
雲の峯かつての浜は貯木場
「さやうなら」気になる背なか百日紅
目を逸し話す少年アマリリス
江の島の駅舎にきはふ夏燕

青葉の会（浦和）

納屋に足踏み入れ気付く梅雨茸
松蟬や追憶の日日山にあり
子育ての追憶たどる夏夕べ
北の大地の「江差追分」夏の海
雨の日の山にわくわく梅雨茸

雄二郎	分け入れば獣道やも梅雨茸 雑草に隠れ梅雨茸生きのびし 閉店せまり追加注文ビヤホール	啓子	背広新調入社四年目青嵐 脇往還韋駄天で行く青嵐	早都子
史代	あゆみの会（浦和）	輝翠	若鮎句会（浦和）	昇
広子	紫の花よりしづく梅雨の朝 花園を彷徨ひをれば梅雨の雷 開け閉ての襖の重み走り梅雨 轟々と梅雨を呑み込む最上川 梅雨晴間大道芸の剣が舞ふ 大梅雨や踏切の音かすかなり	靖子 重子 俱子 和子	夕風を黄金に染めて日は落ちぬ 年齢確認押してビールよ格蘭パ 角打や手酌の赤星瓶ビール 「隠し事無しよ」と拳万薔薇の宴 薔薇そよぐジャズセッションのごと戦く 碧空に咲き誇る薔薇ふと妬し 薔薇園の淑女も姫も夢のあと メンチカツ夫には言へぬ昼ビール 薔薇香るバスタブ満ちて我ひとり 湯上がりの裸御免の缶ビール	真菜 芳春 貴 ひとみ 秀子 香音子 月を 喜夫 稀香
玲子	きざきサークル（浦和）	藻好	蘭の会（浦和）	小麦
美代子	黒南風をはつたと眺む日蓮像 黒南風や浮棧橋の軋む音 黒南風や魚醬の匂ふ漁師町 明け早し参禅清し坊泊り 山小屋の固きベッドや明早し 黒南風の離島を巡る医療船	昇 俱子 啓子 由美子 和子	ママチャリの親子に強き走り梅雨 青梅を齧る赤穂の塩少し 梅雨空やひとの世話ごと手を出すな 男梅雨嫉妬してゐるこの星が 訪ふ家の留守ばかりなり梅雨晴間 梅雨しとど仰ぐ戦災受難者碑 青葉寒千年の松鑑賞す 改札に父見つけたり梅雨の傘 老木の青梅や算することもなく トカレフに青梅込めて世界平和 葉隠れに青梅見えて小糠雨	小峰 夕峰 風舎 和子 幸子 洋子 伸子 さよ子 月を 京子
清子	コクンシテイカルチャー俳句教室（さいたま新都心）	延昭		
倭子	紫陽花の寺領がビルに攻めらるる 殉教の島に鐘の音夏霞 古拾祖の手ずれの桐箆笥 木道を歩荷が二人夏霞 古拾棚に富山の置き薬	健司 俱子 由美子 洋子		
恵子				
光子				
美紗子				
真理				
美智枝				
美子				
公子				

新 樹 の 会 (浦和)

釣られても威風堂堂大鯰
過去帳に見覚えなき名額の花
熱帯夜夢は現在過去未来
荒川に水門いくつ梅雨鯰
越谷の鯰は美味し旅の空
偉さうに髭をたづさへ鯰かな
小 梅 の 会 (浦和)

花蜜柑會長宅の立ち話
庭先の草木萎るる炎暑かな
更衣まだ着ぬ古希のプレゼント
山盛りの素麺涼し茗荷の子
純喫茶といへば「田園」ソーダ水
め だ か 句 会 (浦和)

葛餅や湯治宿より聞く瀬音
時の日に柱時計の止まりけり
凜と咲くいろは紅葉の花一つ
困難は受け容るるもの汗拭ひ
誕生日手持ぶさたのくずの餅
難産のみどりこの声夏きざす
沙羅の花庭苔に落つ二つ三つ
葛餅にしばし忘るるあれやこれ
一株の紫陽花に見ゆる百の色
葛餅や二時間冷やし待ち焦がれ

風 子
清 吉
道 雄
徹 修
鶴 城

隆 文
進 子
道 然
隆 進

六 弦
章 嘉
道 代
庄 志
和 子
知 子
美 津子
恵 美子
日出男

さくらんぼはしご十段空広し
お気に入りの北一硝子葛の餅
芒種の節令和七年米騒動
葛の餅喉が忘れぬ吉野かな
水明濡つくし句会 (大阪)
河鹿鳴く隠れ切支丹の無言
父の日や父と息子のコップ酒
河鹿の音乗せて小さき滝落つる
万緑の風に時空を漂へり

☆

☆

妙 子
月 子
は る み
三 茅
人 美
ノ ル ン
洋 子
智 恵 子

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

〔指導者〕 網 野 月 を 〔作 品〕 5 句 〔受講料〕 1,000 円

〔方 法〕 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110 円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

〔送付先〕 網 野 月 を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

水明創刊 95 周年記念祝賀会・全国大会のご案内

■水明創刊 95 周年記念全国大会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
受付開始 12 時 30 分 開会 13 時 閉会 16 時 30 分
- 会 場 ロイヤルバインズホテル浦和 4 階「ロイヤルクラウン B」
〒336-0062 さいたま市浦和区仲町 2-5-1 TEL 048-827-1111
- 行 事 95 周年記念作品（評論、俳句、エッセイ）入選作品の発表と授賞、水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の授賞、新誌友紹介の表彰、新季音同人および新同人への委嘱状の授与、兼題入選句の発表と授賞、講評等。

■水明創刊 95 周年記念祝賀会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
受付開始 16 時 30 分 開会 17 時 閉会 19 時
- 会 場 ロイヤルバインズホテル浦和 4 階「ロイヤルクラウン C」
- 行 事 来賓ご挨拶、アトラクションなど

■申込締切

令和 7 年 8 月 31 日

■参 加 費

記念全国大会・記念祝賀会	25,000 円（フルコース宴食）
記念全国大会のみ	5,000 円（コーヒー付）
記念祝賀会のみ	20,000 円（フルコース宴食）

参加費が高額になりますので、7 月号に同封の郵便振替用紙にてお支払ください。

また別途、「申込書」は発行所総務部へご郵送ください。

※なお、発行所へ直接持参される方は、指定「申込書」に参加費を添えて総務部へお申し込み下さい。（発行所ポストへの投函は出来ません）

※申込み後のキャンセルにはキャンセル料が発生することがあります。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎皆様お誘い合せの上、多数ご参加ください。

水明創刊 95 周年記念祝賀会・全国大会実行委員会 実行委員長

水明競詠

(令和七年)

恒例の季音・水明全員が対象の水明競詠です。ふるってご投句下さい。
掲載は十二月号になります。

兼

題

「夜長」

「夜永」「長き夜」「長夜」の傍題に限る

「唐辛子」

「たうがらし」「鷹の爪」「ピーマン」「南蛮」の傍題に限る

「京」

(詠み込み) ※秋の季語で詠む

句

数

三題通じて五句

締

切

九月二十五日

投句用紙

九・十月合併号巻末に添付

「りんどう忌」のご案内

【日 時】 2025 年 10 月 25 日（土曜日） 午後 1 時受付

【会 場】 さいたま共済会館 501 号室、502 号室

【投句締切】 午後 1 時 30 分

【兼題・投句】 投句：2 句 兼題：「かな女忌（かな女の忌、りんどう忌）」
「色鳥（傍題なし）」

【会 費】 1,000 円（昼食はありません。飲み物は各自ご持参下さい）

【申し込み】 8 月号の巻末に添付の申込書に会費を添えて、10 月 15 日
までに発行所総務へお申し込み下さい。

※申し込みの無い方の入場は原則として出来ません。

※状況により予定を変更する場合があります。

◎りんどう忌の参加者で、今年（令和 7 年 1 月～12 月）に米寿（満 88 歳）

又は喜寿（満 77 歳）を迎えられる方には記念品を贈呈致します。

事業部

好評連載 小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人 飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉 俳句の水脈・血脈……………角谷昌子 ※内容は変更になる場合があります。	特別鼎談 生のことば ——農と俳句—— 太田土男×若井新一×鈴木牛後	特 集 躍動する動詞 ●動詞の手強さ、難しさ ●季語と動詞の関連性 ●動詞の可能性 ●鑑賞 動詞が光る俳句	巻頭作品 50 句 一 高橋睦郎 作品 21 句 一 西山睦・佐怒賀正美 俳句 9 月号 予告 8 月 25 日発売 予価 1,200 円（本体 1,091 円）^⑩
電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。 発行 角川文化振興財団 発売 株式会社 KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/			

かな女先生のお宅の門柱

さいたま

小駒さち子

「はじめの俳句教室」で「水明」初代主宰の長谷川かな女先生のことをお聞きして、びっくりした。高校時代、長谷川かな女先生が、すぐそばにいてくださったのだ。と言っても先生にお目にかかったことは一度もない。

かな女先生のことを最初に教えてくれたのは、名前も知らない先輩だ。入学間もない日の朝、あひる坂の上にある高校に行く途中で新入生に声をかけては、かな女先生のお宅の門柱の前まで連れて行ってくれたのだ。

歩きながら、かな女先生が浦和市の名誉市民で、新しくなった埼玉会館で「傘寿」のお祝いをなさったこと、別所沼と調神社に句碑のある、有名な俳人であることを教えてくれた。

私が入部した地学部先輩も、一緒に下校した時、先生宅の門柱の前で立ち止まり、先生のことを教えてくれ、「後輩にも伝えてほしい。」と言った。もちろん、私も翌年後輩に伝えた。

高三の昭和四十四年九月二十二日かな女先生がご逝去され、みなで悲しんだ。市葬の日、「あなたも参列するでしょう。」と声をかけられた。と声がかけて、名前も知らない先輩は、句会にも参加していた。そこで、私は「かな女先生はどんな方ですか。」と尋ねた。先輩は、

「句会には、先生のお宅の二階です。若い人もいっぱいいて、履物をそろえないで上がってしまう人もいます。すると、黙って履物を揃えていらつしやるような方」

私が「かな女先生を尊敬しています。」という原点に

この言葉があったのだ。

今、かな女先生のお宅はない。けれども、門柱のあったところには、やはり門柱が立っている。今でも、かな女先生がすぐそばにいてくださるような気がする。

自然さん、お帰りなさい!!

模原

町野広子

水明八月号の季音「月一欄に、あなたのお名前を見つければ感動致しました。思慮深く物静かな自然さん。思えば城子師亡きあと、白鷺さんそして、ことはさん。思とバトンが繋がれ、その方々を支える「鳥羽谷」の編集長として無くてはならない修行で心身を鍛えられた。念の方で、「山伏」として厳しい修行で心身を鍛えられた。念の方で、その素朴なお人柄は、誰からも愛され、郷のよです。そんな若狭を皆大好きでまるで自分の故郷のような懐かしさを抱いていますよ。

つれづれに

さいたま

香田裕誌

私は泊り掛けの独り旅を多くする。解放感を味わう人との交流を好む。最近珍しい旅をした。三月犬吠埼への旅で銚子電鉄に乗ったら乗客は数名の車内は海外の方から南米チリ放送局の四人のクルーでロケ隊の撮影に来日したとの事。大型の映像カメラや機材での撮影影を私は了承。

次いで五月末には郡山駅のホテルで初老のバリ在住のフランス人の独り旅に出会う。新幹線の席が隣り合わせとなり馴れない英語での談笑に花が咲く。二週間の休暇をとり来日した由、同じ趣味の写真技を互いに披露しつつ太宮駅に着き親密なる強い握手で別れた。

風 声

○現代俳句六月号——「列島春秋」欄

籠枕二つ並べて小半時

原田 秀子

○現代俳句六月号——第二回現代俳句「風を詠む」欄

生垣に触れゆく影の夏めけり

菊池ひろこ

耳うちも目配せもせず親鴉

池田 珪子

薫風やスケートボードの二人連

小駒さち子

籐椅子の父の形に包まれたし

小林 京子

縄文の世に昼寝する遺跡掘り

五 明 昇

夏浅し富士の農鳥顯るる

反町 修

青とかげ太古知りたる顔をして

原田 秀子

はんなりと否む女や青山椒

本橋 稀香

水仙や介護審査の母凛と

葛城千世子

○現代俳句六月号——「風を詠む」秀句を探る」欄

田中充氏の感銘八句抄に

五 明 昇

○くちら（中尾公彦主宰）六月号——「受贈俳誌美術館」欄

襟元にときめき秘めて春の服

鬼之介

○こんちえると（関根道豊版元）五月号——「受贈誌紙お礼」欄

二胡に添ふ猛き尺八別れ霜

鬼之介

三月の野原へ高き肩車

石山かつ子

串抜けばこれぞ目刺のデスマスク

大村 節代

うりずんや「十九の春」の流れくる

清水 桂子

節分を煉瓦の壁のレトロカフェ

吉川 拓真

○こんちえると（関根道豊版元）六月号——「受贈誌紙お礼」欄

夏めくや剣士が厚き胸を拭く

鬼之介

未知数の米の価格や青田風

原田 自然

伐採の木の根に発芽別れ霜

福田 千春

図書館の窓辺のむすび春の昼

清水 桂子

春暑しバリアフリーの無き神社

吉川 拓真

○好日（高橋健文主宰）六月号——「受贈誌御礼」欄

野仏に供花の匿路や草青む

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）六月号——「諸家近詠」欄

流鏑馬が終はりいつもの木の芽道

鬼之介

○筈（山本一步主宰）六月号——「受贈誌の一句」欄

枯木星話し相手のいらぬ夜

寺町 知子

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和七年六月三十日現在—

山本鬼之介	50口	山戸 美子	3口
笹本 啓子	5口	南條さわゑ	5口
関根 千恵	5口	十倉 和子	10口
大橋 勉代	10口	葛城千世子	5口
高橋満耶子	5口	—合計98口—	

後記

連日の猛暑に会員の皆様には、体調は如何でしょうか。

日本は何時の間に、温帯から亜熱帯気候になってしまったのでしょうか。しとしと降るやさしい雨、やわらかく頬を撫でる風が今や、雨が降ればどしゃ降り、晴れば猛暑、こんな地球を次世代に残していくのかと思ったりします。

去る六月三十日に、九十五周年記念作品の選考会が行われました。五人の選考委員が、各自の選考結果を持ち寄りました。そして、長時間、喧喧譁譁と協議して、やっと次の作品に決定しました。やれやれ疲れました。

俳句 正賞 五明 昇

「みすゞ刈る」

準賞 池田雅夫

「百花繚乱」

佐々木史女

「日日悠悠」

エッセイ

正賞

清山尚己

「愛おしいネックレス」

準賞

元田亮一

「母の歳時記」

評論

正賞

なし

準賞 青木鶴城

「長谷川秋子の天命と俳句」

以上の作品は、来る九月二八日ロイヤルパインズホテルで行われる、水明九五周年記念全国大会にて、他の賞と共に表彰。九・十月号に作品を掲載予定です。

また、会員全員に応募の兼題句も例年同様、数多く応募を頂きました。こちらも、天・地・人並びに特選等の表彰が、大会当日ありますので、お楽しみに…。

コロナ、インフルエンザ等が少し下火になりましたら、百日咳が流行しているとか、やはり、手洗い、うがいが有効とか。どうぞ、お気をつけて。(節代)

今月のはてな？

蘿(こけ)の花

墜栗花雨(つりりあめ)

蟆(ぶゆ・ぶと)

蚎(ぶゆ・ぶと)

跂望(きぼう)

諸鬘(もろかずら)

幸魂(さきたま)

髻髪(うながみ)

呪(まじな)ひ

荆妻(けいさい)

半部(はじとみ)

箴言(しんげん)

楊梅(やまもも)

「今月の？」六月号に誤植がありました。お詫びして訂正致します。

正 雪花菜

誤 雪花菜

頁 17 19 20 23 41 46 46 66 69 71 78

水明

令和七年八月号
通巻一一三九号
令和七年八月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶西一〇二二

電話 048-822-1474

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本鬼之介

印刷所 中央美版

季音 雪・月・花

十一月号 八月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏 名 (排 号)

題

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧に書きお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先 (電話番号)

氏名 (本名)

年齢

歳

きりとりせん

十二月号 八月二十五日締切

都・市・町名	氏名(番号)
都市町	

[illegible]

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

氏名（本名）

歲

山紫集

十一月号 八月二十五日締切

氏名(俳号)

十二月の兼題

「蝸 螂」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

令和7年りんどう忌

参加申込書 《申込締切 10月15日》

き
り
と
り
せ
ん

りんどう忌 10月25日（土）	参加費 1,000円	出席します
-----------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

◎米寿（満88歳）および喜寿（満77歳）を迎えられる方は自己申告してください。

・米寿を迎えます	・喜寿を迎えます
----------	----------

※「米寿を迎えます」「喜寿を迎えます」を○で囲んでください。

上記参加費を添えて申し込みます。

2025 年 月 日

住 所	〒		
氏 名		電 話	— —

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	— —
電話所有者	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届け下さい。
（緊急時のみに使用し他の用途には使用しません。）

《申込書送付先》〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21 水明俳句会

水
明
通
信

都市又は府県名	姓並びに俳名
---------	--------

通信欄
(近況・感想などご自由にお書き下さい)[illegible]

送り先 二三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四十一一二 水明 発行所

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

[illegible]

季 音 抄

山本鬼之介

後ろから読む朝刊や明易し
未だ袖を通さぬ着物花みかん
約束は生きてゐること薔薇香る
親しげに近づく鴉梅雨の晴
黒南風の磴駆け上る陸上部
青葉光巽櫓を押し上ぐる
結界は女郎蜘蛛の囲奥の院
植田千枚水の匂ひの出羽の国
籐椅子にシヨパンとワイン更けゆく夜
黒南風や祠仕舞ひの立烏帽子
緑蔭に吐息幽かなるニンフ
野生馬の気品ある貌青水無月
桜まじ江戸の名残の常夜灯
村ひとつ植田の中に浮かび居り
分け入れば獣道やも梅雨茸
黒塀や蜘蛛の囲揺らす三昧の音
田植唄音頭取るのは土の声
石段の手摺たよりの蟻もをり

星野和葉
町野広子
松井由紀子
茂木和子
森川義子
森本早苗
丸山マシミ
大場順子
梅澤佐江
近藤徹平
原田秀子
内田恵子
保坂翔太
横山君夫
笹本啓子
石田慶子
染谷風子
洪谷さいち

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

次の原稿を募ります。随時発

行所宛、ふるってお寄せください。

なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

▼散歩道へ身辺トピック▼

▼山紫水明へ随筆▼

水 明 抄

山本鬼之介

流鎚馬や南無八幡と矢を放つ
山峡の青田波打つ誇りかな
東雲の卯の花垣の庵かな
夏霞見知らぬ街に迷ひ込み
烏賊釣火また一つ消ゆ能登の海
新緑の杜の深さを奥社へと
千年を駆くる走馬や諸鬘
信濃路の何れも美しき夏野かな
麦笛やふる里と云ふ知らぬ町
短夜や遠き貨車の音続きをり
春昼や身じろぎもせぬ亀の首
黒穂抜く親の仇の如くぬく
病窓の樹々の煌めき聖五月
紫陽花や足湯から見るかな女の碑
緑さす巨樹の天蓋鬼子母神
夏雲や足の三里を押し山路
五月雨や猛き二本の御神木
ひるがへり住処を捜すつばくらめ

倉田星歩
岡本祥子
反町修
菅原真理
小林京子
岡田宣子
皆川更穂
霜多光代
森下山菜
田中弘子
寺町知子
飯田忠男
綿引まりこ
元田亮一
阿部幸代
丸屋詠子
石関六弦
本橋稀香

水 明 例 会 案 内	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木林 和京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 明淵 昇雄 徹
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和七年八月一日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第八号)

定価 一〇〇〇円